

# 思想家としてのニーチェ

小野 浩

## I その任務と課題

## II その根本語〈永劫回帰〉〈超人〉〈力への意志〉について

## 思想家としてのニーチェ

### I — その任務と課題 —

Erlöser du ! selbst der unseligste-  
 Beladen mit der wucht von welchen lösen  
 Hast du der sehnsucht land nie lächeln sehn?  
 Erschufst du götter nur um sie zu stürzen  
 Nie einer rast und eines baues froh?  
 Du hast das nächste in dir selbst getötet  
 Um neu begehrend dann ihm nachzuzittern  
 Und aufzuschrein im schmerz der einsamkeit.

——Stefan George 〈Nietzsche〉——

「思想家としてのニーチェ」、これはあまりにも自明にして平凡な設定のやうにみえる。しかし「凡そ思想家とは何であるか?」といふ問に対して即答し得る人は果して幾人を数へるであらうか。思想家とは思索を任務とするものである、といふ答は、答としてなほ体をなしてゐないといへるだらう。蓋しこの答はさらに次の問を誘発し、次々と折重つて答と問とが錯綜し、極まるところを知らぬことにもなりかねないのだから。けれどもこのやうな問から出発するのが専門哲学者のゆきかたであり、その好例は〈Was heist Denken?〉の著者ハイデガーにみられる<sup>(1)</sup>。しかし私たちの問題の核心はニーチェなのだから、彼の姿を常住に眼前に髣髴してゐるものにとつて、むしろ答は簡潔なものとなる。すなはちニーチェその人に即して私たちは答へよう、「思想家とは、自分自身をも含めてその時代に対する(gegen)、また来るべき時代のための(Hin)〈裁断者(Richter)〉たるとともに、〈戦士(Kämpfer)〉としての任務を進んで引受けたもの、否、むしろ否応なくそれを受諾せしめられたもののことに他ならない」と。〈批判〉をその哲学の根底に据ゑたカントは、この意味において、当時の思想界を独断論の仮睡から揺り覚まさうとする批判者として、戦士といふよりは厲厳な裁定者としての風貌を示してゐると言つてよからう。

ヘーゲル——これはそのエンサイクロペディア的な規模の大きさにおいて、略々大思想家の一人とみてよいであらうが——、彼に到つてドイツ観念論は、一応、体系的に完備した近代思想の大伽藍としてその姿を現す。しかしその構架の核心に脆弱なところを含み、ひとりフォイエルバハ、マルクスらの左翼デマゴグのイデオロギー的暴力に屈しただけでなく、キェルケゴオルのような厲厳峭森な思想家の燃犀鋭利な眼光によってその核心にひそむ嘘偽を白日のもとに曝露されてしまったのである。

ヘーゲルのおつとめは、自らも手を貸して仕上げた西欧観念論が、完成の極、息を引きとったとき、葬儀委員長と

してその任務を手落なく遂行するところにあったと思はれる。そしてその演出を完遂して自身も安楽死を遂げたこの委員長<sup>の</sup>遺骨は、ヘーゲル左派の手で掘られた墓穴のなかへ、冷嘲を浴せられながら抛りこまれた。

イデオロゲンとは、本来、破壊と消滅に手を貸すだけのメフィストオ的浮浪者の群にすぎず、思想の世界とは全く無縁なのである。ただし、彼等の仕事ごとく無益のものだけといふのでもない。多年の風雪に痛みのはげしい古家屋を建て直すためには、一応これを破毀し去らなくてはならない。これはいはゆる「破毀<sup>こ</sup>し屋」の仕事である。しかし毀すためにも一応、筋道らしいものを掲げて同調者たちを納得させておく方が破壊力の増強には役立つだろう。これがイデオロギーと称せられる「破毀し屋」の論理である。「破毀し屋」の仕事振りは大人たちの心を痛ませるが、創造や建設に身に沁みた体験を持合はせぬ子供たちには、結構、勇しく愉快にみえるものらしい。彼らには破壊に伴ふ土煙も、創造の火の手とともに渦巻き上る煙もまだ区別がつかないのだから。

よっておよそ時代が真の生命を失って形骸化しながら、しかもその魂の抜けた大形骸を以って未来への展望を壅塞してゐるやうな場合には、やはり「破毀し屋」の受持つべき任務もあり得る。しかし彼らが許容された範囲を逸脱して破壊のための破壊に奔ったために生じてくる荒涼たる瓦礫の山を前にして人は、一応敗滅に倅ひするものの敗滅は見送りながらも、幾百年もの風雪の中で手厚く守られてきて、今後も伝へつづけらるべきものまで破壊し去って顧みない兇徒の増上慢に対してはおのづから湧き上る憤怒を抑制することはできないだらう。

思想家の真の矛先は、生命を喪失しながらもなほ自己を主張しつづける旧思想に対してではなく、玉石ともに焚く種類のイデオロゲンに対しても向けられる。フォイエルバハやマルクスが、ヘーゲルの「鬼子」として父親殺しをやったのけたとすれば、ニイチェのヘーゲルおよびヘーゲル左派に対する戦はそれとおよそ根差すところを異にする。ニイチェの出自は全く別趣のところにあった。ヘーブライ教化されたロオマ教への徹底的抗議派としてのプロテスタンティスムスのパアトス、ヘーローイッシュなものとして独自の見識のうちに把持されたショーペンハワー

・ペシミズムス、ディオーニュゾスの古代への憧れと、ヘーラクレイトスを中心とするソクラテス前派の哲人たちへの共感、これらがニーチェといふ実存をその最深の根柢において支へる諸要素なのである。よってニーチェのヘーゲル批判は、ヘーゲル哲学の偽瞞に向けられてゐたと同時に、ヘーゲル観念論による剝製化を許したキリスト教の頽廢性、またプロテスタンティズムと資本主義との野合を鋭く嗅ぎわけながら、イデオロギーによって仮構された虚妄の正義を幻視せしめて、愚民を誑かしてゐる西欧ニヒリズムスのラディカルな帰結としての共産主義へも向けられてゐたのである。

ヘーゲル観念論に入院して死病の床にいたキリスト教の神は、ニーチェの時代にはすでに息を引取つてゐた。この神はもとよりイエスの神でもなく、またユダヤの神でもなく、イエスの仮面をつけさせられたヘブライ風の神で、ローマ教によって仮構されたものであった。この神の死を誰も気付かぬうちに看取したニーチェは、その間の消息を「Gott ist tot!」といふ有名な定式に収約した。一方マルクスはイエスの神が、その十字架上の死とともにこの世から脱去したことを識つてゐただけでなく、このローマ教の神の死についてもニーチェよりも早く知つてゐた筈である。

彼が「宗教は民衆の阿片なり」と強弁したとき、それを彼は宗教一般について言つたのではなく、彼の眼中にあったのは主として、このローマ教の神に他ならなかつたといふこと、これは銘肝を要する。ラビの子としてのモルデカイ・マルクスが信仰してゐたのはユダヤ教の唯一絶対神——実は沙漠の大魔神「ヤーヴェ」(Jahwe)であり、この神が最初の日に等しく、なほ熾烈に劫火を燃しつづけてゐることを彼は疑はなかつたに違ひない。「ヤーヴェ」信仰は二十世紀に入つてもなほ、カフカ文学やヴィトゲンシュタイン哲学の深く匿くされた核心であるらしいことを、私は山口勲氏の諸論考から教へられた。<sup>(2)</sup>ともあれニーチェは、ローマ風に西欧的な神の死の必然の結果として、澎湃として全西欧を洗ひ去らうとするニヒリズムスの高潮<sup>たかし</sup>を予観した。想へば西欧諸族とキリスト教との対決の経緯を究めようとするなど、まことに氣の遠くなりさうな嘶なのである。

私たちはイエスの神が愛の神であり、彼の挙揚したものが戒律の宗教ではなく、愛の宗教であったことを疑はない。ダンテ、アジジの聖フランチェスコ、イタリア・レネサンスの初花ジョットオ、マイスター・エックハルト、ヨハン・ゼバ스티アーン・バッハなどがイエスの密旨を誤りなく汲みとった詩人であり、宗教者であり、芸術家であり、音楽家であったことに疑ひの余地はなからう。しかしルターの場合、事情は必ずしも一義的ではない。ローマ教に対して勇敢に宣戦を布告し、〈義認論 (Rechtfertigungslehre)〉と、聖書のドイツ語訳を以ってプロテスタンティズムの基礎を築き上げた彼も、新約と並んで旧約を不磨の聖典として尊崇した。ここに彼の決定的なミスがあったと思はれる。蓋し旧約を重視する以上、折角のプロテスタンティズムもまた、イエスの愛の宗教の圈内から逸脱して、ヘブライ風の戒律宗教の深淵に迂りおちてゆくことも遂に避けられないであらうから。すでにバッハの大作「受難楽」にはその翳りが感ぜられる。

しかしこのミスにも拘らず、戦士としてのルターがニーチェの先駆者であり、同志であったことに変はりはない。蓋しそれは征服者の戦ではなく、ヘブライ教化されたローマ教によって、それぞれの伝統を歪曲され破壊された西欧諸族がその健かな根源を回復せんとして企図した自衛のための戦の一つであったから。

よってプロテスタンティズムのパートスと生理を身ぬち深く嗣承して生れたニーチェの批判は、新旧約両者との絡みあひのうちに展開された西欧二千年の歴史に即して遂行されなければならなかった。そしてこの千年戦争を戦ひぬくことこそ、まさに時代がニーチェに課した任務であり職責に外ならなかったのである。

このやうな時代にあつて思想家として任務遂行に堪え得るものは必ず当代の一流である。同時代の詩人や芸術家のうち、思想家としてのニーチェが到達したと同じ高さに登り得たものはなかったであらう。時代が要望したものは何よりもまづ裁定者としての思想家であつた。一流の詩人や芸術家の活躍を許すまでに時代はなほ成熟してはゐなかったのである。そのためにはまづ時代の病巣が鋭く剔出され、瓦礫の山が撤去されなければならなかった。一流の天才

がまづ思想家として動員され、批判し裁断しなければならぬ時代といふものが存在する。本来、歌ふべきであつて、語るべきではなかったニーチェの新しい魂<sup>(2)</sup>が、歌ふことを許されなかったのはまさに悲劇的といふべきであらう。時代の至上命法はニーチェといへどもこれを回避することは許されなかったのである。

## 2

かくて思想家としてのニーチェは、没落にまで熟したキリスト教的な西欧ニヒリスムスの予見者として、西欧精神史の剣力峯に立つ戦士であり裁断者である。すなはち彼自身、ニヒリスティッシュな破壊者の、またやがて実現さるべき稔り豊かな未来を準備する更新者の双つの相貌をかねたヤーマスなのである。一つの面は過去に、他の面は未来へ向けられてゐる。

ギリシャは二千年のむかしに地上から姿を消した国であり民族である。にも拘らず、遙かな歳月を隔ててニーチェの心をあれ程強く魅惑したものは何であつたか。それは雄渾な神殿建築でも、そこに安置された神像類でもなく、また壺絵類にみられる絵画などでもなく、アイスキュロスの諸作を核心とする古代劇の悲劇性に他ならなかつた。その体験のための準備はすでにプフォルタ在学中に開始されたが、それが真にゆるぎなき原体験として自覚されるにはなほヴァーグナーとの直接の接触を必要とした。これこそニーチェのヴァーグナー体験が包蔵する最も重要な意義なのである。

プフォルタの少年ニーチェを惹きつけたものはまづプルタルコスであり、ディオゲネス・ラエルティオス<sup>(1)</sup>であつた。すなはち偉大な英雄達と思想家たちであつた。

ニーチェがギリシャ芸術の美について語ることは意外に少い。彼のギリシャ讃称は主としてギリシャ民族の偉大さ、その生命力の充溢、政治家、芸術家、詩人、哲人などの群峯の高峻と勇姿に向けられる。それらがニーチェの畏

敬の情を誘発し比武心を燃え立たせる。彼は文化の至処が、単なる教説によって達成されるものでないことはよく心得てゐた、「その心情の底から何らかの偉大な人間に傾倒したもののみが文化の殿堂に参入するための最初の清祓をうけるのである」<sup>(2)</sup>と彼はいい、また「心ゆくまで飽くことなくプルタルコスを味ふがよい、そしてこの英雄たちを信ずることによって諸君自身を信ずることを敢てせよ。そのやうに非近代的に教育された人たち、すなはち成熟して英雄的なものに慣らされた人たちの百人もあれば、この時代の騒々しい似而非教養など永久に沈黙させられることになるだらう」<sup>(3)</sup>と記述する。

ここにニーチェの意味するところは明かである。より高きものへの情熱と低劣なものに対する戦である。彼は教育者にして裁断者である限りにおいてのみ思想家であつた。「教育者としてのショーペンハワー」において刻み出されたものは、ディオゲネス・ラエルティオスの意味における古代風の思想家像、すなわち最高尺度の具現者、一切の思惟の立法者、あらゆる行為の道標であつた。ニーチェによれば、ショーペンハワーは職業知識人たちの間にあつて孤高な賢者であり、多数者の激しい抵抗に伴ふ危険をもとせず、鈍麻と怯懦に徹底的な攻撃の矛先を向けて止まぬ戦士であり、ゲーテ的人間よりも一層強いタイプであつた。<sup>(4)</sup>これは本質的には静観者にすぎなかつたショーペンハワーその人の姿とは全く異なるものなのだ。

ニーチェ以前のドイツにおいては、ヴィンケルマンとゲーテとが、およそドイツ人には珍しい強健な血液に由来する異教的奔放不羈と南方的な健康を自然から恵まれてゐた。遠くヘラスへ向けられたこの両者の澄める瞳に映じたものは高貴な節度<sup>イデス</sup>と美しき形であつたが、彼らは民族の教育者として、それをまづドイツの同胞に教へこまうとしたのである。

この両者とひとしく、否、一層熱烈にドイツ国民を教育し改鑄しようとな願した若きニーチェが、その燃えるやうな瞳を以てギリシャを凝視したとき、彼の実存を包囲する時代の切実極まる要求から、現代には欠けてゐて、しかも

往時のヘラス人がまことに豊かに具有してゐたものの核心に一属深く契合することができた。かくて彼は一切の芸術に先行するものとして、ギリシャ人の体軀にみられる溢れ漲る生命力と端麗さを確認し、またヘラスの文化と生活にみられる本源性と若々しさだけでなく、昂揚されるとともによく抑制された性情の陰翳をも見遁すことはなかったのである。人はたとへば「悲劇の誕生」におけるエーディポスやプロメーテウスなどの関説箇所にあらはれた彼独自の神話解釈にそれを看取することができるであらう。

さらにニーチェはヘラス文化の至高の美と叡知、神気をおびた人間の生命が自然を超えての、否、ときには反自然ですらある高昇の成果であることも認識した、そしてそれら一切に君臨しその中心に鎮まるものは、ニーチェにとつては「識られざる神—ディオ—ニュゾス」に外ならなかったのである。

古代劇に登場する英雄たちは、その余りの生命力の充溢のゆゑに、往々にして神々を無みする傲慢ヒュブリスに陥入る。そのヒュブリスを思ひ知らしめて、英雄たちに悲劇的没落を強課するものはディオ—ニュゾスであるが、英雄たちはまさにその没落においてはじめてディオ—ニュゾスの神威をうつつく、髣髴し、カタルシスの境地へ救ひとられる。

「英雄的人間」といへば、直ちに粗剛単純な人間像を想ひ描くのは、頽廢を高度文化の精髓とみる錯覚に由来する。日本古代においては日本武尊の悲劇的行蔵はまさに英雄的なものの典型であつたと言つてよからう。これは一部に偏重される片々たる私小説や単なる人生觀的演劇の登場人物とは全く異次元に属する。これについてはかつて詳説したから再説は差控える。ニーチェが英雄的人間について語るとき、彼の視線がつねに世界觀的次元に注がれてゐることを人は忘るべきではなからう。明治以降の日本詩人として世界觀的次元に発想して真に豊かな稔を示したものは副島蒼海と安江不空の二人に絞られる。<sup>(5)</sup>近代詩人としては日夏耿之介が世界觀的視圈のうちに人生觀的情緒を撰取する微妙な詩境を達成した。作家としては鷗外が、ときに世界觀的次元への高昇の姿勢をほのかに示すことがあるが、漱石とその亜流（芥川龍之介も含めて）、白樺派など、滔々として人生觀的低次元への退潮を現示してゐる。漱石のお説



教類も必ずしも世界観的次元に属するものではない。もとより中堅詩人作家たちの人生観的にビーダーマイヤー風の濃かな持味は、それはそれとして評価さるべきであらうが、それはまたおのづから別箇の問題である。

露伴に到って始めて私たちは世界観的次元の消息を伝へるに堪える雄渾な筆力に遭遇する。その代表作はたとへば「運命」などであると思はれる。就いてみられたい。

そのヒュブリスのゆゑに神々の震怒を蒙り、あくまでそれに反抗しながら、遂に破壊の深淵に姿を消し去る英雄的人間の悲劇性、これが「悲劇の誕生」におけるニーチェの視点である。

ヴァーグナーの楽劇は、言葉としてみれば詩文ではなく、上演された劇と音楽のための台本にすぎない。ギリシャ悲劇の具身的可視性とはそれは全く無縁である。ユーリピデスはニーチェによって挙示された造形的にヘアポロ的なものゝと、音楽的にヘディオーニュゾス的なものゝといふ古代ギリシャ人の絶類の芸術的衝動以外の一切の刺激手段を全挙して、効果を狙った劇作家なのだが、その意図と作用において彼は古代のヴァーグナーともいふべく、従ってヴァーグナーは近代のユーリピデスとみておいてよからう。両者とも詩人ではなかったのである。

## 3

ヘブライ的怨恨感情 (Resentimentgefühl) の汚染を蒙ったローマ的キリスト教の陰湿な侏儒道徳から西欧を清祓せんとして、ニーチェが高く掲げたものは、〈英雄的なもの (das Heroische)〉といふ古代風に世界観的理念であつたが、その核心をなすニーチェ独自の深邃な体験を、彼はヘディオーニュゾス的なものゝといふ象徴的な一語を以て記述した。ここに彼は汪蔚たる根源的生命を、その死敵なるヘブライ風にキリスト教的反世界観から守護すべき揺ぎなき基準を入手したものと信じた。彼は近代西欧の没落を予観しつつ、二千年の昔に姿を消し去ったギリシャ文化頽廢の過程を追蹤して、遂にこれを決定的な没落に追ひこんだ一大デーモンの登場を目撃する、すなはちソクラテスであ

る。ソクラテスはここに、ディオーニュソスの向ふを張る反対勢力として神話化される。すなはち彼はディオーニュソスに対する反対神話の主神の座に据ゑられ、かうしてニーチェ一流の仕方ではソクラテスに敬意が表明される。要するにソクラテスとは、現代に到るまで西欧の空を陰う、ついに曇らせてきて、遂に原水爆による全人類滅亡戦争の準備を完了せしめた人々―すなはち理論理性からのみ人間行動のあらゆる法則を演繹せんとする理論的人間の鼻祖であり象徴に外ならない。ニーチェによればソクラテスは「いはゆる世界史の転回点であり旋渦である」<sup>(1)</sup>。歴史的にみればニーチェのこのソクラテス神話は支持され得ない。ソクラテスはニーチェの主張するやうな頽廢的人間ではなく、頽廢に反対して働く力で、門弟のプラトオとともに新たな秩序を新たに形成しようとしたのである。しかしニーチェのこの神話は最初から歴史とは無関係の箇所に設定されたものであり、ディオーニュソスの使徒としてのニーチェは、証明しようとしたのではなく、情熱を喚起しようとしただけのことなのである。<sup>(2)</sup>

ニーチェがいちゆる「ソクラテス主義」において許容することのできなかったものは、身体と大地の意義の上方に、概念を駆使する意識の暴力支配を据ゑたといふこと、すなはち健全な本能を無視して「*ratio*」を重視する科学的態度であった。キリスト教は生命を敵視して靈魂聖化を説くものであり、アレクサンドリア的傾向は生命疎外の精神性に固執するものなのであった。ニーチェは出発点においてこの両者に明確に宣戦を布告したが、これはその全生涯を通じて、全世界を向ふにまわしたニーチェひとりによる持久戦となる筈のものであった。

ニーチェのギリシャ体験は実に彼の最大にして最深の体験であり、時代と世代を等しくする人々の基盤を根柢から震盪すに足る力を、彼は無限にそこから汲み上げることが出来た。だが彼の華麗な処女作「悲劇の誕生」は、ニーチェの期待も空しく世に迎へられることはなかった。文献学者たちはギルド独特の憎惡を剥き出しにしてこれに対応した。時代はまだこの著作にふさはしく成熟してはゐなかったのである。しかし世人の沈黙がいかに破りがたくとも、その憎惡がいかに度しがたくとも、それによっていささかも迷はされることなく、毅然たる態度を保持しつづけたこ

とによってニーチェは、本来の召命者たる実質を身証したものと云へるだらう。とはいへ彼もまた時代の子の一人として、身ぬち深く<sup>わだかま</sup>蟠るデカダンスの病根に悩みつつ、<sup>とへはたへ</sup>十重二十重に彼を締めつけてくるニヒリスムスの重囲をその頃からすでに痛感してゐたやうにみえる。差当りこの袋小路からの脱出を彼は盟友ヴァーグナーに求めようとした。しかしヴァーグナー自身がヘブライ風のキリスト教に由来するニヒリスムスに宿命的に絡みつかれてゐることを、「パルズイファル」に確認せしめられたとき、その夢想は跡かたなく吹き払はれ、彼は時代と世界に対し、孤身、皆を決して立向はなければならぬ覚悟を固めさせられる。ヴァーグナーこそニーチェにとって、古代ギリシャを現在に呪現せんとする大規模な煙火の打上げを指導し、支持してくれる力ある唯一の盟友と思はれた。二人の周囲にはヴァーグナー派も賑かに集って、ともにこの火遊びに熱中してゐるものと思ひつづけてゐたが、気がついてみればヴァーグナーはその一派とともにいつの間にか姿を消し去って、蒼然と暮れ沈む枯野に取り残されたのはニーチェひとりにすぎなかった。「火遊びのわが一人ゐしは枯野かな」。大須賀乙字のこの一句に私たちは、凄然たるニーチェの孤愁を想ひみるのである。

ニーチェは単に一個の傍観者として世紀末の西欧を断罪したのではない。彼自身にも絡みついてゐた近代病の症候は、ニーチェ以前にあつても、極く少数ながら、炯眼な詩人、思想家によって確認されてゐた。ヘルデルリンのヒュペーリオンによって下された嚴厲な判決に照してもそれは明かであるだらう。〈世紀末〉といふ普遍的感情がすでに十九世紀半ばに目覚めたことは、フロオベルやボオドレールによって情感されてゐたところを想起すれば判明する筈である。苦惱者として、また認識者として、ヴァーグナーもその仲間に入る。彼らはデカダンスとニヒリスムスについてはニーチェの教師であり、その先駆的形式を示したものと言つてよからう。

ニーチェ自身この世紀末の世界に嵌めこまれ、時代最悪の諸毒を敢て嘗味し、時代の死病そのものを、その生身<sup>なまみ</sup>に即して証知し、また独自の高処を確保しつづけながらではあるが、時代の汚穢なる低湿地をも親しく踏破し、劇しい

嘔吐感のために、殆ど身を危くする瀬戸際にまで立たされたといふこと、これこそ西欧ニヒリスムスの無類の予見者としてのニーチェを彼以前のニヒリスムスの教師や予告者たちから截別するところのものなのである。

ニーチェによって予観され予言されたものは、第一次大戦を経て漸く普遍的認識と化し、存在論、実存哲学、弁証法神学などが、その脱出の方途として摸索された。

ハイデガーのあの浩漭なニーチェ論はニーチェを決定的なニヒリストと記述することによって、この問題の十九世紀最大の提起者であったニーチェの姿を完璧に刻み上げようとしたものであった。その上でハイデガーはニヒリスムスからの脱出の手がかりを、ヘルデルリートの詩作に見出さうとしたかのやうである。第一次大戦から第二次大戦へ向ふ中間期において、ニヒリスムス克服の摸索の迹はリルケやゲオルゲおよびその門弟らの詩業にも窺はれるが、この両詩人にとっても、ヘルデルリートは一個の極星として仰がれてゐたやうに思はれる。この両詩人の詩業は、危機克服の方途を探つて貴重な示唆に富むものであるが、この点で手塚富雄教授の労作は、両詩人の姿を対照的に現示しつつ、その功績と限界を詳密に測定評価して間然するところなきものであり、研究上の古典として永く生命を失はないであらう。

両詩人の言葉との格闘、その浄化と改鑄の努力はまことに並々ならぬものであるが、その言霊の威振りに、人類をして起死回生の協同体を結成するに足る威力が果して封じこめられてゐるであらうか。古代においてもプラトンの国家論が、避けがたく没落へ向ふギリシャの滅亡を防ぎ得なかったと等しく、ダンテやゲーテのやうな絶類の天才の力を以ってしても、とめどなく没落に向ふ全西欧の地這りを抑止することは最早できないであらう。蓋し民族や国家の存立を保証する秘鑰は、白馬翰如たる幽境に密封されてゐるであらうから。

八岐の大蛇にも似た多国籍企業者の一群が隠微な、しかし深密な脈絡を保って金権政治の大謀網のなかに万国を押し包み、老大な利潤を壟断し、人類殲滅兵器が全地球の隅々まで配備を了した今となつては、西欧ニヒリスムスここ

に極まり、地球と人類の絶滅は時間の問題にすぎぬといふ結論に反対する論拠は最早、何一つ存在しないやうに思はれる。

しかしそのやうな時代に、また西欧以外の国に生を享けた日本人として私たちは「Wo aber Gefahr ist, da wächst das Rettende auch.」といふヘルダーリンの言葉<sup>(3)</sup>を信じて生きたいと念ふ。それは「信」として「真実」ではあっても「科学的」に証明できるものではない。およそ「心」に密着した「厳密」(streng)な学の探究にあっては、「精密」(exakt)な科学的方法なるものも、飽くまで補助手段たるにすぎない。科学的証明を経て始めて「真理」(Wahrheit)と認定される種類のものと異なり、「真実」(Wahrhaftigkeit)は全く証明不可能なものであり、逆説的に言へば、証明可能な「真実」など、まことの「真実」となすに足らないともいへる。「真実」の探究を枢核とする歴史学の方法論を考究するとき、ここに格別の難関のひそむことは一応考慮しておいてよいであらう。

最奥の立脚地としての「信」——迷信もまた歪曲された病める信である——に拠ることなしには、「真実の学」(Wissenschaft der Wahrhaftigkeit)の探究は、コムパスなくして大洋を渡るに等しいであらう。ニーチェのディオオーニュゾス的なものへ寄せる情熱も一種の信仰であり、生涯、彼はこれを手放さず、それでこそ、たびかさなる極端な知的冒険にも乗り出すことができたのである。イデオロギーもやはり迷信の一種である。自ら思ひ違ひをしてゐるやうに科学的なものではない。それが人を悪酔ひさせて乱暴狼藉を働かせるのは、ヴァインと妄想してメチルアルコールを吞されてゐるからに過ぎない。それは病めるパアトスである。妖霊邪鬼に憑依された人間の精神錯乱として、それ自体、まさにニヒリズムそのものに他ならなかった。

## 4

若きニーチェは、アイスキュロスの真髓を教示されたことに感動し、若人の純情を捧げて心からヴァーグナーに随

順した。愛するものとして、また認識するものとして、ヴァーグナーにもその最奥の秘密を開示させずにはおかぬやうに瞳を凝したニーチェは、自己自身の夢を彼に托してゐたのである。蓋しニーチェにとってヴァーグナーは古代風の〈Dithyrambischer Dramatiker〉と思はれたのだから。しかし彼がヴァーグナーに期待したものは多きにすぎた。ヴァーグナーが領略しようとしたのは現在であつたが、ニーチェが確保しようとしたのは未来であつて、そこにすでに両者の志向の根本的な喰ひ違いがみられたのである。それだけに幻滅から来る衝撃は痛烈であつたに違ひないが、ヴァーグナーとの交遊を機縁にニーチェ独自の見識によって得られたところも大きく、彼は終生それを忘れることはできなかった。

比類なき古代詩文の通曉者ニーチェ、そしてそこに根差して時代の痛烈な裁断者となつたニーチェが、ヴァーグナーにおける劇場性の過剰にいつまでも氣付かずにある筈はなかつた。それに氣付きながらも何とか決裂を回避しようとして、「バイロイトにおけるリヒアルト・ヴァーグナー」を筆にしながらニーチェは、ヴァーグナーの意欲にすぎないものを恰も能力であるかのやうに執り成し、彼のために一切の弱点を隠蔽しようと苦慮してゐることを、注意深い読者は見遁がさないだらう。このとき既にニーチェは、内心、単なる疑惑の域を超え、すっかり断念して、けりをつけてしまつてゐたと思はれる。ヴァーグナーの劇場性はその根柢において古代劇の悲劇性とは全くゆかりなきものであり、この〈俳優性―劇場性〉こそ、十九世紀病の一つとしてニーチェの唾棄して止まぬところであつた。<sup>(1)</sup>凡そニーチェほど〈劇場性〉と無縁な思想家もないであらう。ヴァーグナーの楽劇がその正体を曝露して、ニーチェにとって目標としての意味を失つた以上、ヴァーグナーの鳶職的劇場性は、この無類に純粹で優秀な門弟を、手許に繋ぎとめるに足る偉大性と純粹性を最早もち得なかつた。凡そニーチェは愛情だけによってどこまでも拘束しつづけられる種類の人物ではない。そしてそこにこそ彼の孤独の深刻な根もあつた。彼を繫留するものは、つねに自己自身を超えたあるもの、すなはち理想的と称せられるものであり、その生れとともに身につけてきたプロテスタントとしての

《良心の自由》といふ独自の法廷を彼は断じて手放すことはできなかった。よって今やヴァーグナーがその正体を曝露した以上、一時は心から師事したこの人に対しても彼は最早、手心を加へるわけにはゆかなかったのである。

ヴァーグナーへの陶醉から醒めたとき、ニーチェは彼の標的が遙か高い人間にあったことを痛切に思ひ知らされる。いま彼の眼底に揺曳するのはプラトンの面影である。もしプラトンがソクラテスによって方向を誤られなかったとすれば、どのやうなものになってゐたであらうか、明かにギリシャ人たちは、その先輩たちよりも一層高次の人間のタイプをまさに見出さうとしてゐたが、そこに缺が入ったのではないか、といふ風にニーチェは想像する。あれ程畏敬されたソクラテス前派の哲人たちよりも、さらに高いタイプとしての可能なプラトン。いまやこれがニーチェの視点である。後年《超人》を幻視しようとするニーチェの視圈にはまづこのやうなプラトンの姿が隠顕し始める。最早ニーチェはバイロイトに復帰することを欲しない。目標はプラトン風のアカデミーである。彼は親友たちとの修道院風の協同体の建設を真面目に考へはじめた。

バイロイトにおける上演の最初の数日に立会ったニーチェの失望は決定的となった。一切の希望の全面的崩壊である。今や彼は手傷を負った獣のやうに孤独に引返す外に途はなかったのである。

## 5

ヴァーグナーからの別離とともに、ときに彼が幻視すると信じたディオオーニュゾスの姿さへ、無限の彼方に霞み去るかにみえたが、二千年に亙る西欧キリスト教に対する厳しい裁断の基準として、この一筋の光を彼は決し手放すことはしなかった。

今やニーチェはヴァーグナーとの悲痛な断絶に由来する身心の惘憊と耗弱に堪えながら、眼前に聳え立つ峻峻な山頂への登高を強要される。恐らくそれはニーチェの生涯における最大の危機であつたであらう。生命の根を卸してゐ

た地盤が崩れ去るとき、あらゆる植物が枯涸の危険にさらされる。当時のニーチェの危機もまさにそれに比定され得るだらう。しかし究極の危険、すなはち、凡そ崇拜し得んがために、神像に替へて偶像に跪拝するといふ危険に彼は屈することはできなかった。愛情も信仰も希望もなしに生きるといふほとんど堪えがたきことに彼は堪えた。吟味と審問といふ彼独自の根本衝動からくる酷烈な情熱を、いまや彼は自己自身へ、または彼の崇拜してきた諸対象へ向ける。いはば自己俯瞰による勝利の矜りのうちに、また不屈な拒否者のプロテスト風な内面的殉教のうちに、あくまで自己と自己の使命を保蔵せんがために。この間の消息は「人間的なもの、余りに人間的なもの」に後年（一八八六年春）ニースでつけられた序文のうちに委曲をつくして語られてゐる。<sup>(1)</sup>

このやうにして彼は数年間、沙漠に暮した。そしてこの切羽詰った境遇にあつては、彼をヴァーグナーから救ひとてくれるやうに思はれたプラトンも、最早、手を貸してくれさうにもないと思はれたであらう。ヘーロスなるものが真に救ひをもたらす筈のものなら、皮肉骨髓を具へた姿で眼前に立つてゐなければならぬといふこと、——これこそヴァーグナーにヘーロスを幻視してゐた短い期間に、ニーチェが体得した貴重な教訓であり、生涯ニーチェの念頭を去らなかつたものである。プラトンが過去の人である限り、ヘーロスとしての彼への信仰も自分を救つてはくれぬことをニーチェはいま認めわけにはゆかなかつた。

ニーチェは最早、理想的なものは何ものも欲せず、その欲するところは、厳格な食餌療法だけであつた。回復期患者の生活を送りながら彼は、自由な風光のなかで、独自の本来の素質から徐々に芽生えてくる新たにして大いなる力に信倚したのである。自己沈潜のこの時期において、彼が好んで心に想ひ描いたのは、プラトンでもプラトン風のソクラテスでもなく、クセノフォンの「回想記」<sup>メモリアリア</sup>に伝へられたソクラテス、すなはち極めて簡素なまたうつらふことなく「仲保者としての賢者（Der Mittler-Weise）」であつた。これは理想的ヘーロスとしてのソクラテスではない。そこにみられるのは、自己に本具の認識のために生きて、自己自身への愛を取戻さうとするニーチェの念願を叶えてく



れる人の姿であった。<sup>(2)</sup>

《自由精神》<sup>フライガイスト</sup>としてのソクラテスの象徴のもとに立つあの時期の諸作、すなはち「人間的なもの」から「楽しい学問」に達する諸著は、リヒターとしてのニーチェの任務報告といふよりは、むしろモノロークとしての性格を濃く宿すものであった。それはそれでまたニーチェの生涯における決定的な段階を示すものである。すなはち、新たな平安は、理想化、悲劇性、浪漫的憧憬、ヒューマニズム倫理などから来るのではなく、具身的現在からのみ、自己自身の生活を力と喜びでみたすことのできる個人からのみ新たな救ひは生れるといふ認識によってそれらはみたされてゐる。

かうして寒冷な地帯から出て次第に黎明の光へと夜を徹して歩を運びながら、壮語的表現は極度に抑制されてはゐたが、ニーチェの裁断者としての任務はむしろ冷酷に遂行されつづけた。蓋し、戦闘正面に変更はなかったから。変化とみえたのは戦術の転換にすぎなかったのである。

彼は従来、偉大・非凡・崇高と考へられた一切のもの、すなはちキリスト教的ヒューマニズムを策源地とする信仰、芸術、理想、希望などのすべてを氷上に引据ゑて凍結させる。それらの仮面を容赦なく引剥ぐことが当面のニーチェの任務なのである。そこに厭ふべく憎悪すべきニーチェのみを眺めるのは、ただ前景に目を奪はれてゐるからにすぎない。ニーチェは傍観者としてこのやうな残酷を敢てしてゐるのではない。彼のメスが彼自身の皮肉へも容赦なく切りこんでゆくことを人は見遁してはならないだらう。ここに《自由精神》としてのニーチェの厳しさがあつた。いかなる場所にも自己を固定しないといふ点にその名誉を求めるこの《自由精神》は、なるほど、厳正な認識者の《念持像》ではあらうが、人間の理想像とはとても思へない。しかしニーチェは常住にそのやうな《自由精神》を憶念しながら、单身この不毛の沙漠を踏破しつつ、足下に地盤が揺れ止まぬ苦しさに堪えてゐるのである。彼は認識のあらゆる可能な視点の変換を敢てし、またさまざまな指標の可能性を試探する。これはニーチェの如き強靱無比な精神に

して始めてよく為し得るところで、薄弱な精神を顧みず、自己の分際を忘れてこれを摸倣すれば、身の破滅を招きかねないだらう。あらゆる信念を疑はしきものとなし、あらゆる態度を可能なものとする彼のこの実験は、まさしくソフィストの流儀であるが、彼が衷心深く抱懷してゐたものは、一個の新たなる〈Du sollst〉を見出さんとするソクラテス風の念願に外ならなかった。ここで地面を這ひまわる単なる仕事師であり整頓屋にすぎない凡常の実証主義者たちからニーチェを截別するものは、彼のゆき方が俯瞰的な飛翔であり、飛過であつたといふことである。すなはち蟻の如き徒輩の夢想も為し得ぬ高処からニーチェは遙か彼方まで瞰制しつつその作業を進めてゆく。

当時、科学の目覚ましい進展に伴ひ、認容されてゐた素材群も相当老大であつた筈なのに、ニーチェはこれら素材の活用を忽せにしてゐるといふ非難を往々にして耳にする。しかしこれは全くの見当違ひというべきであらう。ニーチェの駆使したものが、既にクラアゲスによって指摘されたやうな細心精緻な心理学に外ならなかったことは銘肝に値ひする。それは一切の実証科学類とは全く別趣の深処に根差すものであつた。物理学はもとより、当時のいはゆる、生理学・心理学・動物学などはいづれも人間とは凡そゆかりなき諸要素から人間を構成しようと試みてゐたにすぎない。

眼の人間であつたギリシャ人たち、また近代ではゲーテなどが、眼に即した直観を駆使するのに対し、深強な音楽的素質に恵まれたニーチェの直観は、世界を形として把握するよりも、運動として、衝動として、また力として把握するところにその特質を示すもののだが、それは〈力への意志〉といふニーチェの根本語の一つに最もよく刻銘されてゐるとみてよからう。よつてニーチェのギリシャ観が、ギリシャ最高の本質とも言ふべき古代造形芸術の直観に密接したものではあり得なかつたところに、やはりその弱点をもつことは否めないにしても、それだけに彼の音楽的心理学の探針は、微妙な深処においてその威力を発揮したと思はれるのである。

## 6

初期の諸々の希望を断念した後のニイチェのあらゆる吟味や異論に共通してみられることは、人間存在の極めて高度な体現とみられる何ものも、ニイチェにとつて高い畏敬と究極の愛情の対象でありつづけることはなかったといふことである。かうしてあらゆる外面的なマースは消滅したが、にも拘らず、自分が裁断者として召命されたもの、法則を探究しつづけねばならぬものといふ意識は遂に消え失せることはなかった。〈高さ〉といふ内面的規準を失ったことはなく、新しき信念の可能性への摸索を怠ったこともない。真偽・美醜・善惡の判決を下すことはもはやできず、また欲しもしなかったが、深と浅、優良と粗惡、高貴と卑賤に対する判断を下すことは止めなかった。そして生涯に亘るキリスト教道德に対する戦——彼はそれによつて最後まで〈背德者 (Immoralist)〉の尊称を身に帯びることを欲した、——それはニイチェ独自のそしてまさにそれゆゑに未聞の新しき法則を見出さうとする揉みあひでもあった。ここでニイチェのいはゆるモラルを人は、古今東西共通の倫理一般と考へてはならない。それは飽くまで日本の〈へみち〉とも、ギリシャの〈エティケエ〉とも、〈東洋道学〉とも性格を異にするキリスト教倫理なのである。ひとたびギリシャに開眼されたニイチェが、真のプロテスタントとしての厳しいパアトスを以て、宗教的生命を喪失しつくして偽善化したキリスト教倫理と徹底的に戦はざるを得なかったのは思ふに当然の帰結であつた。

## 7

「キリスト教の神は死んだ——たとへ一切がそれに反対の証言をしても——」、この確信こそは思ふに、ニイチェの心に重く深く蟠まつてゐたものに違ひない。彼はキリスト教の法則は一切これを無視して生きようといふ、凡そ西欧の人間としては極めて恐るべき覺悟を固めさせられたのである。それゆゑにこそ人類のために一つの新たな標的

を設定すべき任務を身に引受け、また衷心からそれを願はずにはゐられなかったと思はれる。旧信仰のあとを追ってあらゆる戒律が墓場のなかへ入ってしまったひ、倫理的拘束の感情もことごとく消滅し、とどのつまりは超個人的な、したがってまた個人的なあらゆる統一が寸断されてしまふといふ状態、すなはちニヒリスムスの崩壊の近づいてくるのを、当時のニーチェほど恐怖心を以て眺めてゐたものはないであらう。

自分が旧信仰から解放された身であることを知つてゐると同時に、選択することを許され、また選択せねばならぬ教師として招命されてゐるといふこと、もはや信仰によつて担はれてはゐない古き諸々の戒律の、また全くとりとめないものと成り了つた旧き諸々の秩序の混沌の中へ角燈をさし入れ、一筋の細徑を示すべき任務を背負はされてゐたといふこと、そこにニーチェの使命の苦渋と品位があつた。彼はひとり信仰だけが法則に内面的支柱を与へ得ることを知つてゐた。それでこそ彼は、自身、不信者の絶望感に堪へながら敢てその態度を厳守し、独自の法則の探究を続けたのである。そして遂に〈力への意志(Der Wille zur Macht)〉といふ形而上学的観念において彼一流の信念を強取し得たと信じた。ここから始めて私たちは、この全戦闘においてニーチェの嘗めさせられた苦杯の味を理解するとともに、旧信仰が回復しがたく失はれてしまったことを知悉してゐながら、このやうな戦を回避し、暮夜ひそかに旧き神のもとへ引返へさうとした人々への彼の衷心の嫌悪感をも想察することができるであらう。彼の駁撃したのは、決して外部のものだけに限られない。朦朧化したキリスト教の諸々の戒律や感情は彼自身の血の中へも深く喰ひこんでゐたのだから。ニーチェが最も独自のものと考へてゐた彼の長所は、自己自身に対する容赦なき厳格さであつたが、一方、最も独自の危険と目してゐたものは、自己逃避と世界逃避、〈共苦(Mitleid)〉の意味における同情である。これはすなはち〈弱さ〉の相互認識であり、感情を共にせよとの強制であり、双方いづれもキリスト教的感情に根差すもので、いつでも欣然と手を差し伸べようとする温き心の反対物なのである。

プロテスタントの生理を身内深く匿しもつていたニーチェは、彼の時代にもなほ生きつづけてゐたキリスト教風の

諸力にも精通してゐてそれに対する繊細な感性をそなへた極く少数の人々の一人であつたが、彼の時代がキリスト教から受取つたものは、魂をぬきとられて寸断された身体と、解きほぐされて生命創造力を喪失した魂の脱け殻にすぎなかった。よつてニイチェは彼が眼前に髣髴してゐた古代風に充実した生の幻視から、このやうな頽廢したキリスト教に対してはどうしても、断罪の宣告を下さぬわけにはゆかなかつたであらうと思はれるのである。

## 8

ニイチェは、キリスト教がなほ花咲ける古代世界を毒殺したと告発してゐるが、キリスト教の新しい神がその支配力をひろげて行つたときは、古代世界の盛期はすでに過ぎ去つてゐたことを彼も知つてゐた筈である。しかしギリシヤ文化の原型象が示す高次にして聖化された存在の姿、すなはち人体の完璧なマースに具象された地上生活全体のあの神化に魅せられたものなら、キリスト教―その暗雲が二千年の永きに亘つて天地を曇らせ、魂の聖化を、身体からの逃避を以て購つたキリスト教を、ギリシヤ文化の殺害者と見做すとしても必ずしも不自然とは言へないかも知れない。だがこのやうな信仰形式の論争は、それが思考領域で行はれてゐる限り、不毛のものであることも忘るべきではなからう。但、その信仰形式が全人間性を生ける形姿として生み出す力をもつ場合にのみ、その証を<sup>あかし</sup>立て得るのであり、したがつて某々が基督者であるか否か、といふことは実はどうでもよいことなのである。

眞の基督者はイエス一人であり、その十字架上の死とともに、キリスト教そのものも死滅したといふニイチェの見解は、もとより彼一流の逆説と考へておいてよいが、そのことごとくが荒唐無稽といふものでもなからう。ユダヤ人サウル事パウルスによつてローマに開基されたいはゆるキリスト教が、すでに偽装ユダヤ教にすぎなかつたことは、夙にL・クラアゲスなどによつて痛論されてゐる通りである。<sup>(1)</sup>その後の西欧諸族とキリスト教との和戦の経緯が、粗枝大葉的素描を以て概断し去り得ぬ消息を含むことにはすでに触れた。

とまれ私たちはニーチェのキリスト教攻撃、彼の不信の情念のうちに、キリスト教そのものによって点火された大火災の最後の炎上を確認する。残されたものは燃え滓、崩れやすく生ぬるき残灰であり、懶<sup>もろ</sup>さと嘘偽、すなはち「教養人の宗教」である。そこにみられるものは偽装された敬虔と、むかしは神聖視されたものの審美的享受にすぎない。それに対してニーチェが鋭く持続的な斬りこみをかけたといふことのうちに、私たちは真の宗教人の姿をみると同時に、悲痛な叫びをも耳にする。深く匿<sup>かく</sup>されたこのやうな宗教心のうちには、確かに新しい覚醒の萌しが認められる、不信のこの絶叫は、なほ与へられてゐない未来の景觀を待ち焦れてゐる人の切迫した心から発せられたものであるから。もはや、彼は旧き神に拘束されてはゐないが、拘束力ある新しい神をまだ見出してもゐないのである。彼の嘲りのうちに心の驕りのみをみるべきではないであらう。旧き神からの解放に際して発せられた洪笑は、羞恥と嫌悪が克服されたことを証<sup>あか</sup>しするものかも知れないが、必ずしも真の勝利の喜びと偉大さの確実性について証言するものではない。さらにニーチェの拒否そのもののうちに新しい告知をみてはならない。生ける信仰は考察し弁別する精神の判断によって破壊され得るものではないが、懷疑と実験の過程に設定される教説の類のみによって、新しい信仰を樹立することも不可能なのである。新しい信仰は新しき神の出現を俟って始めて湧出するものであり、そこからして漸く人間生活のあらゆる形式の更新は遂げられるであらう。

しかし真の宗教は本来は天造のものとして「民族宗教」たることを建前とする。イエスも仏陀も一個人として新たに宗教を拵<sup>こしら</sup>へたものではなからう。彼らは民族の存立とともに古き宗教の革新者、改革者に外ならなかった。

ゲルマン諸族が独自の民族宗教を喪失せんとする過程において、ローマ的キリスト教の侵襲を蒙り、これとの惨澹たる戦を経て、第二の宗教としてキリスト教をゲルマン化することに一応成功した経緯は、一切の粉飾なしに精究されなければならないだらう。

とまれ、それぞれの民族宗教を喪失した西欧諸族に対し、一応その民族性にふさはしく同化されたキリスト教が、

民族文化の展開に多くの寄与をなしたことも公平に認められなければならない。しかしそれが自己の体内にひそむ〈異質者 (Fremdkörper)〉であるといふ意識は根強く残存しつづけた。今やこのキリスト教はその可能性を消耗しつつくし、宗教としての真の必然性を喪失し、屍解の過程において猛毒を放射しつつある。このことを誰よりも早く感付いたのはニーチェであるが、二千年の永きに亘り、西欧諸族に対し拘束力を保ちつづけたキリスト教に替る拘束力ある宗教を生み出す可能性は、ゲーテやヘルデルリンに想ひをさせてみても、宗教本来の建前から考へて、今の西欧にはもはや、残されてゐないのではないか。ニーチェが〈アポロ的なもの〉と〈ディオオーニュゾス的なもの〉との綜合としてのギリシャ悲劇に即して、祭祀文化の復活を憶念したオリエンティールングそのものに誤りはなかったが、祭祀の喪失とともに死滅し去った古代文化の復活は、やはりニーチェ一流の白書夢にすぎなかったと言ってよからう。但し、この視点から、生命を喪失して没落に瀕しつつ、なほ世界と人類を欺きつづけてゐるローマ的キリスト教の正体を曝露し、これを断罪するといふことが、ニーチェに課された嚴厲な任務であり、西欧においては彼以外の何人も堪え得なかった悲劇的使命であつたことに変わりはないのである。

## 9

ニーチェの致命的発見以来、第一次大戦を経て、漸く事態の重大さに気付いた人々により、瀕死のキリスト教を回生せしめんとして、様々の方途が講ぜられた。あるひは〈危機神学 (Theologie der Krisis)〉ないし〈弁証法神学 (Dialektische Theologie)〉といひ、あるひは〈脱神話化 (Entmythologisierung)〉といふ。

ところでK・バルトにしても、頂天立地、イエスをイエスとして端的に受容するといふよりも、まづ何よりも聖書を尊重するといふルター以来のプロテスタンティスムスの宿痾を患ひつづけてゐた限り、生涯の大労作 (Die Kirchliche Dogmatik) を以てしても、否、それが老大であればある程、彼自身はもちろん、その追随者たちも益々深く神学のジ

ヤングルの中へ迷ひこんで、遂に脱出の途を見出すことはできなかったであらう。やがてバルトとはまた別途に、ハイデガーの影響をうけて、実存論的解釈を導入したR・ブルトマンの新教神学の打上花火も、西欧の厚い雨雲の中へ儚なく消え去ったかにみえる<sup>(1)</sup>。

その間にもニヒリスムスの水位は加速度的に昂まりつづけて一瞬の休止もなかったのである。キリスト教徒はその数からみれば、なほ億を以て数へられるであらう。しかし宗教の真価は信徒の数を恃んだ政治的勢力といふところのみあるものではなからう。事は人類の生死に関する。世紀末近くニーチェは、なほ誰の眼にもみえなかったものを看取したが、当時彼が目にしたものとは桁違いの規模において、いまは万人がそれを眼前にしつつ、手の下しようもなく呪縛されてゐるのである。宇宙領略まで射程に入れた核兵器の底止を知らざる展開、天文学的数字の財力を擁して世界をがんに掬めにしてゐる多国籍企業者の横逆、それらのいづれもが、K・レーヴィットによつて的確に記述されたヘブライーキリスト教的世界否定<sup>(2)</sup>に脈絡すること、自己欺瞞に墮せざる限り、何人にも等しく痛感せられるところであらう。西欧ニヒリスムスはここに最悪の段階に登りつめてしまった。蒼空を飛翔しつつ、遙か地平に妖しき一筋の煙を瞥見したとき、やがてそれが全地球を火焰の海に呑みこむものの兆<sup>きざし</sup>なることを予感して、ひとり警鐘を乱打したニーチェは、狂人視されて嘲笑のうちに葬り去られた。しかし全地球が文字通り、焼土にされ、永久に生産力を奪ひ去られようとしてゐるいま、ニーチェの予言を嘲笑し得る人が果してあるであらうか。

## 10

ところでこの決定的な危機を迎へて全地球が炎上し、焼土と化し去ったとき、この焼土に犁を入れ、それに再び生産力を贈与するに足る力をニーチェの思想は有してゐるであらうか。

ニーチェを、ヘツアラトゥストラの詩人、超人の告知者、永劫回帰の教師、さらに反基督者(Antichrist)の



たらしめたのは、若くして彼の心に深く刻みこまれた〈識られざる神〉の予感であり、その生涯を通じてこの神は、遙か彼方から彼を手招きしつづけてゐると彼には思はれたであらう。しかしニイチェはディオニューソスの姿をさながらに眼前に髣髴し得たわけではなかった。したがってそれを躍動する凝密な形姿として現示することも、音楽的に微妙なリズムのうちに封じこめることもできず、彼の言葉は、遂に教説と説話の域を超える日を持ち得なかったのである。

真の宗教的信念は、教説によって目覚めさせられるものではなく、深邃な直観の威力にふれて心の深奥に点火されることなくしては不可能であらう。たとへばプラトンやダンテはそのやうな直観の保持者であつたと思はれる。そのやうな天才者たちの直観にふれて始めて心に点火された人々の形成する火圏は旋渦を描いて燃え上りながらその円環を拡大させてゆくであらう。その速度が緩慢で、帰依者の増加が遅々としてゐても、それは必ずしもその〈信〉の真偽を判定する基準にはなり得ないであらう。人の心から心へと道をつけてゆくといふこと、火から火へ燃えうつてゆくこと、それが肝要なのである。

ところでツァラトゥストラの信念は一人の信徒をも産まなかつた。人類の新しい貴族を培養しようと目論んだニイチェの周辺には、彼の遮幾した結盟は遂に生れなかつたのである。ヴァーグナーは彼の働きかけることができたかも知れぬ人々をすべて、自分から奪ひ去つたとニイチェは嘆いてゐる。たとへ私たちには必ずしも好ましいものではなくとも、ヴァーグナー風の世界、ヴァーグナー的人間といふものは可能である。しかしそれに見合つたニイチェ型の人間といふものは存在しないし、今後もないだらう。

ツァラトゥストラの〈説教〉を生み出したニイチェの魂の緊張はまことに無類のもの、彼独自の体験に発するものではあつた。しかしそこに幻視されたものがどのやうなものであれ、それは飽くまで探究者の、また予言者のそれ、それによって心身をみたされ、溢れこぼれておのづから人を惹きつけて止まぬ靈氣を放射する真正の告知者のそ

れではなかった。彼の最高の力もあくまで先駆的予言者の力であり、創造者の力ではなかったのである。蓋し彼によって提供されたものは、新たなる源泉ではなかったのであるから。なるほど自分をその絶類の事業に犠牲として捧げたニーチェの姿は壮烈極りなきものではあるが、それだけに一切の随順者の近接を拒むものでもあった。彼の最高の願望は凝ってツァラトゥストラを生み出したが、遂にそれは、それ自体の生命を獲得することはできなかった。若きニーチェがキリスト教的西欧の地平を突破して遙か彼方にギリシャ世界を願望したとき、彼に働きかけた玄妙なものの体験を彼は〈ディオオーニュゾス的〉と記述し、そこに〈識られざる神〉を予感したが、この神は遂に具身的に輝ける姿で彼の眼前に臨在することはしなかったのである。後期の陳述においてはそれは往々にして生産し破壊する力一般に対する寓喩的名称にすぎなくなり、詩的に昂揚されたときに限り、やや内面的視影の趣を示すこともないではないが、可視的形姿となることはなく、讃歌類に封じこめられることもなかった。

一方、ツァラトゥストラは、あくまで独自の神をもたうとするニーチェの強引な要請から生れた窮余の〈申し子〉にすぎなかった。かの〈悲詩〉「高き山々の頂より (Aus Hohen Bergen)<sup>(1)</sup>」にも歌はれてゐるやうに、雪と氷に蔽はれ、白熊遊ぶ絶巔に孤棲する彼のものには、いかに念入りに食卓をしつらへて客を待ってもほとんど訪れるものはなく、極くまれに顔をみせるものがあっても、たちまち逡巡して踵をめぐらしてしまふ。遂にニーチェは自分自身のなかから、その血肉を頒ってツァラトゥストラを生み出さなければならなかった。そのとき彼は、自己の眼前に、また自己の外部に、生涯その獲得につとめた自己自身の至高の姿を幻視し得たと信じたらしいが、それはあくまで彼ひとりの神にすぎなかったのである。

## 11

ここで「ツァラトゥストラかく語りき (Also sprach Zarathustra)」が、本来の詩文ではなく、説話的性格の著しい

作品であることに注意を促したい。

凡そニーチェの著作に表明された諸想は、あるひは明確な、あるひは略々推察可能な自己告白に通徹され圍繞されてゐるもののだが、この作品における告知者ツァラトゥストラ自身の述志を、それらから区別するものは、僅かにその言語形式の点に存するにすぎない。それはいづくにも把握可能な形象を示さないのである。身振の類もほとんど可視的なものとはならず、ただ僅かに魂の身振り、光・空気、精神的風景の高さ、といふやうな、手に触れがたいものが、何となく眼前に漂ひ出てくるやうに思はれるにすぎないのである。本来的に詩的と呼ばれ得る抒情的で讃歌的な箇所は、数も余り多くなく、それほどひろがりも有しないが、ヴェルフリン風に言へばそれらは〈絵画的に音楽的 (malerisch-musikalisch)<sup>(1)</sup>〉であり、〈彫塑的に形姿的 (plastisch-gestaltend)〉ではない。その力が、形成された象徴や、崩れ去ることなき的確なリズムのうちに存することはまれである。その揺曳する美しさや濃厚な甘さは、昂奮を呼ぶ余韻類や振動、また多彩で響きのよい刺激から来るもので、いづれも詩的効果の儚ない要素にすぎない。その眼前に揺れ動く諸々の幻影は、音楽家のそのやうに心の動きの譬喩であり、その意義は〈観 (Schau)〉自体のうちに封じこめられてゐるのではない。その歌謡類は歌手によって読まれるとき、その耳にきこえてくるであらうメロディの伴奏を願つてゐるのである。この書は途方もない心の緊張を言葉に放電したものである。言葉を道具並びに素材として駆使用する点にかけてニーチェは確かに達人ではあり、インスピレーションの確かさと、人を捉へて放たぬ力はそのに由来すると考へてよいであらうが、それは飽くまで説話者としてのことであり、詩人としてのものではなかった。すなはち「ツァラトゥストラ」はリズムミカルに放射力ある言葉において語られるが、言語型象と化したリズムをそこに聴きとることはできない。

少年時代からニーチェは、凡そへものを言ふ術において鍛錬を重ね、次第にそれを完璧なものに仕上げて行つたので、遂に大講演の術における巨匠として、ヴァーグナーの向ふを張る域にまで達したのである。彼は講演術の完璧

極まる体现者として、その特権を存分に活用する。すなはち彼は事物について語るのだから、その説話は無限に、また無尽蔵にみえる。しかし、事物について語るのではなく、へものを創造する詩人は、飾ひわける耳によって重さの尺度を、直観する眼によって形姿の尺度を眼前につきつけられてゐるのだから、それらの限界のなかに拘束されてゐて、説話者に比すれば、往々にして単純に乏しくまた冷醒にみえる。たとへばニーチェに先立って、真正なディオーニュソスの使徒として、その詩業における任務を遂行したヘルデルリンを想起するがよい。ニーチェに比し言葉においても著作においても乏しかったこの人、古今の著作に通曉することのより少なかったこの詩人が、西欧人たちに、再びギリシャの神々を呼び上げるといふ偉大な希望の幾分かを抱かせたのである。

たとへ短小な詩形においてであらうとも、高次の人間性を潑刺たる姿で包蔵するものであれば、単なる教説的言辭によつて人類の目標が設定される場合よりも、その生産力は豊かな筈である。しかしニーチェの超人なるものは、この種のものではない。いかにニーチェが憧れにみちた声を振り絞つてそれについて語らうが、一人一人の聴き手は、ニーチェ一流の諸々の夢想を回想させられるにすぎないであらう。要するにそれはニーチェといふたった一人の人間の夢想型象のための名称にすぎない。たとへいかにその一語一語が、発見者の情熱にみだされて、偉大と高貴と美への渴望に震へてゐようが、美はその名称が挙示されることによつて呼び出されるものではなく、おのづからに生れるものであり、新しき貴族は、高貴なものの出生と生長とともに成り立つのである。よりよき種を生むためには、何が高貴であるかを語ることだけでは足りない。蓋し評価が人間を形成するのではなく、真の人間は真の人間性を宿す模範に随順して形成されるのだから。力と偉大とはへひろがりと強さの尺度にすぎず、無数の形式において考へることができ、したがつて形成力を欠くものである。力への単なる意志は、人間の緊張と業績を増大させることはできようが、何人をも、彼が本来あるところのもの以上に昂揚させることはできない。もし自己の限界を無視して、強引に自私を押しとせば、結局身の破滅を将来するにすぎなからう。あらゆる方向への従来の限界の踏

み越えによって、新しいマースが人間に与へられるのではない。そのためにはいつの世にも、その民族の精髓を具現した詩人・芸術家の出現に俟たなくてはならない。彼らこそ、それぞれの民族にふさはしきマースの伝世者なのだから。そのやうな生ける央心から、はじめて範域は劃定されるので、〈ひろがり〉によって央心が規定されるのではない。ニーチェの〈超人〉は決して新たな根原形象とはなり得なかったし、またなり得ないだらう。それが意味するところは蓋し、限界の厳しい劃定において始めて形成さるべき人間本来の分際を忘れて、これを天にまで持ち上げるものなのであるから。それは古代ギリシャ的な意味において〈傲慢〉<sup>ヒュブリス</sup>そのものであり、神を無みするその叛逆に対しては電撃に打たれて没落する以外に途は残されてゐないであらう。

この意味で後期のニーチェは次第に、古代悲劇に登場する英雄たちを想はせる風貌を宿しはじめ。神々と人間たちの援助なしに、凍りつく孤愁のなかで自己と世界へのマースを喪失し、不信の涯の孤立状態のなかから、自己自身の意志と事業の神化を象徴するツァイトウストラを強引極まる自己受胎において生み出し、〈超人〉出現の〈大いなる真昼〉(Der große Mittag)を夢想し、この超人産出のための方策として〈永劫回帰〉の教説を構想する、ここに、ニーチェの悲劇的没落のための条件はほぼ揃ったものとみてよからう。

回生の見込みなき重症に陥入った世紀末の西欧に宿命的に組みこまれて、それと凄絶な死闘を演じてきた自己の一生を、極度に鋭く明るい光のなかに照し出しながら、時代のあらゆる壊敗の様相を簡浄な筆触を以て素描しつつける〈Ecce Homo〉において、〈語り〉(Rede)の力は極度に昂められてゐて、思想の流れはいづこにも凝滞をみせてはゐないが、いはばこの劔刃上のバランスが一髪の違和をみせた場合、その筆者が瞬時にして精神的錯乱の闇に顛落し去ることにもはや疑ひの余地はなかった。本質的には慎しみ深い人間であったニーチェが、修辭的誇張を遙かに超えて、まことに過大な——第三者からみても必ずしも不当とは思へないにしても——自己評価を敢てせざるを得なかったところに、苛烈極まる長期戦に由来する精神の鬱結と心情の痙攣の並々ならぬものを看取して、私たちは痛ましく

暗然たる感を催さざるを得ないのである。

## 12

私たちはニーチェの没落の要因を彼の意欲とその方向にのみ認めて、ヘブライーキリスト教風の立場から、彼を断罪しようとしてゐるのではない。それは主として、单身全西欧を向ふにまわした三十年戦争における孤立無援に由来するものである。しかしニーチェが生みつけられた西欧のあの時期において、その病根を白日のもとに抉り出し、それを完膚なく断罪するといふことは、時代そのものによってニーチェに課された任務であり、キリスト教的なものの対極たる古代ギリシャに定位したニーチェが、その悲劇の英雄たちに親近な没落を遂げたといふこともまた、宿縁の催すところであつたかも知れない。ニーチェは自己の没落において、酸敗の極に達した世紀末西欧の真唯中に、深く共感しつづけてきた古代的英雄性をまことに鮮烈に身証したものと云へるだらう。

白蟻の如き Letzte Menschen の大群によって占拠されてゐた当時の西欧を、いかにしてニーチェは愛しまた信じ得たであらうか。西欧的人間の信仰は燃えつきようとしてゐた。その残灰によって暖を取ることも、愛し得ぬところで休息することも欲しなかつたニーチェが、彼の飛翔する高処から俯瞰した広域を支配し得ると信じたといふこと、その結果、近さへの、また近さがもつ重みへの感覚が失はれて行つたといふこと、未来の国を求めて出発したこの探險家が、後背地の一切を毀ち去り、確固たる地盤を喪失したといふこと、旧きものへの信仰だけでなく、常住するものとしての人間そのものへの〈信〉を喪つてしまつたといふこと、そこにこそ人は彼の禍の根をみるべきであらう。

ニイチェは「超人」を目標とし、「永劫回帰」といふ思想の鉄槌を以て人間を改造し飼育することを欲した。だがこのやうな企図は不毛に終らざるを得ないだらう、蓋し「飼育する思想」といふものは存在しないのだから。ここに私たちは、ナツイス・ドイツにも誤って承け嗣がれたニイチェの最奥の蹟<sup>ま</sup>きを確認する。意欲された「飼育」は人爲的な擬<sup>ま</sup>ひものを工作できても、遂に神々しい生産の道ではあり得ない。ニイチェはその生涯の事業を信じようとして、その独自の最高の力、すなはち思想家としての審問の、裁定の、評価の力を、世界創造的な神々しい力に昂め得ると妄信した。しかし真に偉大な哲人や教師は、批判や評価の基準を定める前に、何よりもまづ、慈念深く観る人であり、「信」の人であつた。これに反し思想家としてのニイチェの任務は、疑ふこと、試みることに、すなわち懷疑しつつ審問し、厳しく裁断するところにあつた。彼にとって認識とは、あらゆる見解を同一線上に並べて実験的に測定してみることに、一視点から他視点へと常住に周環的移動を試みることであり、深く観入して、辛抱強く啓示されることを待つといふことは、必ずしもつねにその核心ではなかった。彼を思想家たらしめ、教師たらしめたものは、「確信」といふよりは、むしろ彼を悩ました諸々の問題に対する常住の質疑に他ならなかったと言つてよからう。幼少の頃から早くも彼は、この世における悪と苦悩の存在に心を悩まし、その正証の根拠を探究して、この兩者を意欲するところにその解決点を見出すことになるが、それが昂じて彼自身の意志を救済者、神に祭り上げることになる。このやうな彼にとっては命令する者自体が、創造者のやうに錯覚せられたのである。

以上は、本来、詩人たるべきニイチェが、頽廢の深淵に止めどなく迂り落ちてゆく西欧世界の裁き手として厳正に、否、余りにも酷烈に思想家の任務を遂行したことの結果である。「裁断者 (Richter)」の次元に留まる限り、いかなる思想家も創造者たり得ないことは、ここに明かになった。さらにまた、発言の厳しさと正しさだけによつては、

人は真の裁断者にもなり得ないことも考慮さるべきであらう。本来の裁断者はその任務にふさはしき権威を、すなわち独自のマースに発する威風とゆるぎなき責任感を具へてゐなくてはならない。しかしニーチェは遂に真のマースを見出し得ず、マース無視のヒュブリスに陥入り、狂気の深淵に没落し去った。かくて〈ディオーニュゾス的なもの〉とヘアポロ的なものとの総合において実現さるべき祭祀文化復活の念願は遂に稔りの日を迎へ得なかったが、没落にまで熟したものを、さらに深淵に突き落とすといふ〈積極的ニヒリスト (Positiver Nichilist)〉の自覚に発する厳しい裁定者として、焼身の危険を顧みず、来るべき時代のための熾烈なる戦において最初の整地任務を遂行したといふところに、思想家としてのニーチェの本来の功績は認めらるべきではないであらうか。

## 注

1

(1) 家蔵のものは一九六一年刊の第二版 (Unveränderte Auflage) であるが、一部、即ち一九五一年から五二年にかけての冬学期と一九五二年の夏学期の講義からなつてゐる。

(2) 山口勲「言語哲学の基礎を求めて―ヴィトゲンシュタイン研究Ⅰ―Ⅲ」(城西大学教養関係紀要一九七八―八〇)  
山口勲「カフカ研究の視座を求めて」(城西人文研究第五号―一九七八年)

同 「ヴィトゲンシュタインの思想を理解するために」(城西人文研究第六号―一九七九年)

(3) 「悲劇の誕生」に後年(一八八六年)に付けられた「自己批判の試み」第三章に Sie hätte singen sollen, diese "neue Seele" und nicht reden! Wie schade, dass ich, was ich damals zu sagen hatte, es nicht als Dichter zu sagen wagte: ich hätte es vielleicht gekonnt. *μὴ γὰρ οὐκ ἔμελλεν* (Musaionausgabe 217 M. A. *μὴ γὰρ οὐκ ἔμελλεν* Bd. III. S. 7)

2

(1) たゞ「*μὴ γὰρ οὐκ ἔμελλεν*」(Beiträge zur Quellenkunde und Kritik des Laertius Diogenes (1870) 参照 (M. A. Bd. II. S. 33—)

(2) 〈Unzeitgemässe Betrachtungen. Drittes Stück〉(Schopenhauer als Erzieher (1874) 〉. Bd. VII. S. 90.

(3) 〈Unzeitgemässe Betrachtungen. Zweites Stück. Vom Nutzen und Nachtheil der Historie für das Leben.〉(1873—

74) Bd. VI. S. 283.



- (4) <Schopenhauer als Erzieher. — Bd. VII. S. 72>  
 (5) 小野浩「歌人・安江不空」(城西人文研究第四号) 参照

3

- (1) <Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik. §15. (Bd. III. S. 103)>  
 (2) 拙著「若きニーチェの識られざる神」とりわけ「ソクラテスの問題」参照。  
 (3) ホムブルクの方伯に捧げられた詩「Palmos」の一節、念のために引用に先行する発端の二行を付加すれば

Nah ist

Und schwer zu fassen der Gott.

Wo aber Gefahr ist, wächst

Das Rettende auch.

でも。 (Grosse Stuttgarter Ausgabe, II. Bd. 1. Gedichte nach 1800—S. 165)

4

- (1) かいつこれについては詳説したことがあるので、再説は差控える。拙稿「ニーチェ・コントラ・ヴァーグナー」(「文化」第三卷第一、第六、第七号) 参照

5

- (1) <Menschliches, Allzumenschliches. Ein Buch für freie Geister. Zweiter Band. Vorrede (1886)> (Bd IX. S. 3—)  
 (2) a. a. O., Zweite Abtheilung: Der Wanderer und sein Schatten. § 86. <Sokrates>. (Bd. IX. S. 236)

8

- (1) Ludwig Klages: <Die psychologischen Errungenschaften Nietzsches. Zweiter Abschnitt. XI. Zur Psychologie des Christentums. Zweite Auflage. S. 147—>.

9

- (1) K・ブルトマンの著作のうち筆者の精読したのは「Theologie des Neuen Testaments: 2Bde (1948—51)」。<Glauben und Verstehen. 3Bd (1954—60)>であり、とりわけ後者の収載論考約十篇の訳稿を所持している(未刊)。  
 (2) これについてはレーヴィットの諸著、とりわけ「世界と世界史」―柴田訳、岩波書店刊―また「Vorträge und Abhandlungen

zur Kritik der christlichen Überlieferung (1966—) 及び 〈Gesammelte Abhandlungen 1960〉を参照せよ。とりわけ後者所収〈V. Mensch und Geschichte, VI. Natur und Humanität des Menschen. VIII. Welt und Menschenwelt.〉を注目に価する。

## 10

- (1) 〈Aus Hohen Bergen〉「善悪の彼岸 (Jenseits von Gut und Böse)」と〈後歌 (Nachgesang) 〉とについてならぬ。本稿に付録として拙訳を添えることにする。河内講師の口語訳および注を参照せられたい。

## 11

- (1) Heinrich Wölfflin: 〈Kunstgeschichtliche Grundbegriffe, das Problem der Stilenwicklung in der neueren Kunst. (erste Auflage 1915)〉参照

### 思想家としてのニーチェ

Ⅱ — その哲学の根本語、〈永劫回帰〉、〈超人〉、〈力への意志〉について —

Blöd tragt die menge drunten, scheucht sie nicht!

Was wäre stich der qualle, schnitt dem kraut!

Noch eine weile walte fromme stille

Und das getier das ihn mit lob befleckt

Und sich im moderdunst weiter mästet

Der ihn erwürgen half sei erst verendet!

Dann aber stehst du strahlend vor den zeiten

Wie andre führer mit der blutigen krone.

— Stefan George 〈Nietzsche〉—

## A 〈永劫回帰〉の問題

## 1

Ｌ・クラアゲスによれば、ニーチェの筆蹟は最高度に生命にみたされて居り、あるひは生氣横溢してゐると同時に故意に精神化されてゐる、それは形成力と表現運動、すなはち生と精神とを〈最も美事に (aufs schönste)〉に統合してゐるものだといふ<sup>(1)</sup>。

クラアゲスにあっては〈精神 (Der Geist)〉と〈生 (Das Leben)〉、あるひはその核心をなす〈心 (Die Seele)〉とは相互に折合ひがたい敵対者とされてゐるのに、この両者が〈最も美事に〉統合されてゐるといふ彼のこの言葉は矛盾を含むと思はれるのだが、ともかく、クラアゲスはこの視点からニーチェを眺めてゆくのである。彼はニーチェの実存と哲学とが、統合しがい双つの勢力、すなはち〈力<sup>ポウ</sup>〉への〈精神的<sup>グアイレ</sup>〉な〈意志〉と、律動的に動きを与へられた〈宇宙的<sup>コスミッシュ</sup>〉な生への〈受動的<sup>パッシブ</sup>〉な必然的体験とによって繋ぎあはされてゐることを一貫して指示しようとする。

ところでこの根本葛藤を、精神<sup>ガイスト</sup>の力の否定によって解消しようとすることは、クラアゲス哲学の当然の帰結でもあった。したがってニーチェの著作はクラアゲスにとっては崩壊して二つの部分に分れる。彼が〈業績 (Errungenschaft)〉と目するものは、それが〈オルギアスティッシュ (orgiastisch)〉な―狂宴的性格の哲学であるといふ点にあり、大きな迷誤は、それが同時に〈力への意志〉の哲学であらうとするところにあるといふ、したがって前者が、真の洞察に由来する本然的な生の歪められざる表現であるに對し、後者は意識して意欲されたものとして偽造を目指す絵空事である、といふことになる。クラアゲスによれば、本源的に体験された〈現実 (Wirklichkeit)〉の真の表現とみられるものは、結局ニーチェの哲学的著作ではなく、いくつかの忘我的な詩であるといふのだ<sup>(2)</sup>。よって肯定的に評価されるの

は、Geist に拘束された Seele としてのニーチェ、すなはち哲学的な人格としてのニーチェではなく、ガイストとは無縁な宇宙的生の表現である限りのニーチェである。宇宙的生を原点とすれば、個体的実存など、普遍的生のまことに儚い担ひ手として、取るに足らぬもの、といふ性格を帯びることになる。クラアゲスによれば、ガイストはキリスト教的存在解釈の歴史的人間とともに優勢を占めたものだが、〈身体 (Der Leib)〉あるひは〈心 (Die Seele)〉の優勢は異教的人生観から打ち出されたもので、ニーチェは彼の肯定的発見を一つに彼の異教的側面に、誤謬の方はことごとくこれをキリスト教的側面に負ふといふ。そしてこの矛盾は〈永劫回帰 (Die ewige Wiederkunft des Gleichen)〉の教説において頂点に達するのだが、ディオオーニュゾスの生の肯定者ニーチェのうちには、まことに劇しい生の憎悪者も同居してゐたとみるクラアゲスからすれば、この教説はヘーラクレイトス風にディオオーニュゾス的な存在肯定ではなく、〈自殺の否定〉にすぎなかったことになる。よって彼は結論する、「此の同じ生を、自己破壊への意志から千度ももぎとり、幾千回も繰り返へして私は生きようと欲するといふ宣言を以て、彼は凡そ案出され得る限りの最も極端なことを、しかも生の肯定に即してではなく、否定の否定に即して成し遂げたのである。それは自己破壊への傾向に對する最も不屈な自己主張の防禦呪文である」と。<sup>(3)</sup>

ニーチェに対するこのやうなクラアゲスの見解にも、もとより否定しがたい眞実は含まれてゐようが、しかし、〈永劫回帰〉的宇宙観の発見におけるニーチェの絶望的抵抗のすさまじさと、究極の肯定的受容における歓喜の表明には、一旦、此の生に死するとも、絶後に蘇生した人の消息に通ふところがあり、この拒否と受容における闇と光との微妙な縫れあひを諦視するためには、もう少し精しくこの観想の核心に迫ってみなければならぬであらう。

## 2

ニーチェはその生涯を通じて、同時代の人々の身心両面に亘る抽象的支離滅裂を憎悪し、生けるノルムを探究し

た。少年時代は彼の姿勢を規定する法則を、成人してからは、それにしたがって時代を裁く永遠のイデーを。ここにニーチェの生涯を貫く軸があり、その軸をめぐるニーチェの態度に変転がみられるにしても、それに迷はされてはならない。ツァラトゥストラに先立つ時代が、一見、実証主義に墮したやうにみえるのは、ソクラテス風の「自由精神 (Freigeist)」の意味で、自ら一個の形姿たらんとする要求に発したものであった。そしてツァラトゥストラ以後にも再び実証主義的傾向が示されたとき、それはニーチェの「念持像」たるこのツァラトゥストラを、浪漫的にではなく、皮肉骨髄をそなへた具身的現実として、非浪漫的に蘇へらせることを目指してのことであつたらう。彼は、実証主義そのものは軽蔑してゐた。それについては「彼岸 (Jenseits von Gut und Böse)」を通読すれば疑ひは残らないだらう。

ニーチェはその強い衝動にも拘らず、遂にノルムを発見できなかったが、その理由を摸索することがではなく、彼がどこまでそれに近づいたかを考へるのが、差当りの課題である。ノルムを体験するための Kairos<sup>(1)</sup> は、当時の西欧にはなほ存在してゐなかつた、否、もはや永遠に失はれてしまったのではないかと考へられる時代に時期尚早に、「ノルムはこれだ！」と決定するやうなことはせずに、カイロスのためにあらゆる可能性を残しておかうといふ心配りが、ニーチェには本能的に具つてゐたやうにみえる。彼は友人たちへの忠実とひとしく、法則への畏敬と敬順に対する生得の衝動を具へてゐて、あの時代において彼が成つたとほりのものと成り得たのだが、それも常に繰返された自己克服によってである。自己克服のこの力が、まさに彼を形成し、また再三再四、彼といふ人物を鑄造する法則となつた。つねに高次の法則を追求して停止を知らぬものにとつて、決定的なノルムの形成を許す法則といふものは在り得ない。ニーチェの依拠したものは、まさに無法則といふ法則であつた。いかに偉大な天才でも、個体的実存の分際で、永遠に妥当する法則を樹立できる筈はないからである。

どこまでも膨張して、一切の形式を爆砕しつづける力の感情において、「永劫回帰」のあの強引な教説を発明した

彼は、そこに、強者を英雄たらしめ、弱者はこれを破砕する基準を掌中に収め得たと信じた。

ニーチェは新しき神話を欲する。初期ギリシャ神話を愛する彼は、既成の因循姑息なキリスト教神話を駁撃せずにはゐられないのである。<sup>(2)</sup> 今や独自の新しき神話を構想したニーチェは、何とか私たちを説得しようとして渾身の力を傾ける。

後期ニーチェ哲学の枢核をなすと考へられるこの複雑怪奇な構想については、すでに十分に紹介され論評もされてゐるにも拘らず、その難解性は相変らずのものと思はれる。大小三千世界、大星雲小星雲・恒星・遊星、また触目の山嶽、江河、湖沼、海洋、沙漠、高原、森林、沃野、人、鳥、獸、昆虫、魚貝、花卉、巖石、巨樹矮樹、砂粒土壤、貴石宝石、気体、流体、原子、電子など、宇宙および人間界の葛藤ことごとく、その微細を極めた末端に到るまでさながらに同じ姿で回帰するといふこの形而上学的観想の成立不可能については、ゲーオルク・ズィムメルなどによつて、すでに数学的に厳密に証明されてゐるところである。<sup>(3)</sup> さればといって、宇宙物理学とは全く異次元に属するこの教説は、機械論的立場から、これを反駁し尽され得るものでもなからう。私たちの問題は、このやうな宇宙的形而上学に示されて、永く埋もれてゐたどのやうな意志が遂に現れ出たかを探究するといふところにある。プロテスタンテイズムに根差した近代西欧気質からすれば、この教説には凡そ生ける意義を認めがたいだらう。前の世の<sup>さき</sup>実存への追憶を全く有せず、後の世の再帰に対しても意識の何らの脈絡も仮定され得ない自我といふやうなものに対しどのやうな影響が可能であらうか、幾千億年の万倍も億倍もの時の流れの後に絶対的な等しさで再帰するものが再び私の自我であるかどうか、といふ疑問に直面して、果して哲学的思惟は持ち堪<sup>こた</sup>えることができるか。

しかしニーチェは初めから、この種の個人道徳など意に介せず、自己中心的視座を遙かに超えたところで問題を提出してゐるのである。彼は、尊敬するソクラテス前派の一人、アナクサゴラスのやうに、その瞳をあげて、高く宇宙を凝視する、そしてそこから彼一流の宇宙的教説、すなはち、神的段階にまで昂められた人間は、自己自身を、この

等しいものを、また世界を永遠に欲するのであって、未來的に改善されたものを欲するのではないといふ認識に対するまことにラディカルな象徴的表現として「永劫回帰」の理念を定立したのである。

この円環状の「Weltanschauung」は、永遠の直線的進歩といふ妄想のかつきりした「反対形象」において、「今」と「此処」の現実を永遠の価値として感得せよ、といふ厳しい要請の提示に他ならなかった。

この教説には、もとより人を危惧させる多少の余剰物がなくもないが、それを払拭し去れば、アナクスイマンドロス—ヘーラクレイトス—エムペードクレス—アナクサゴラスなどソクラテス前派の哲人たちの精神と深く契合する要素を含むことに人は気付くであらう。

ここに再び、若きニイチェを激しく動かしたあの浪漫的心情、現在に生きるよりも、より多く未来に生きようといふ理想主義的態度の露頭がみられる。科学の進歩に眩惑された十九世紀の「進歩楽天主義 (Fortschrittsoptimismus)」は、ニイチェの最も唾棄するところであったが、一面からみれば「超人」の理念など、まさに進歩主義理念の極限型象のようにみえないわけでもない。ニイチェは恐らく彼独自のこの危険を感じとってゐたのもあらうか、この「永劫回帰」の教説において、振子を余りに激しく反対側に振動させたので、遂にこの教説には高貴なマースは生れなかった。高昇しまた下降する時代、睡眠し覚醒する神々の変替のうちなる持続を超出して、創造する力が、押しこめられて数学的に等しき反覆の輪となるといふことは、必ずしも全面的に創造的直観のなかに基礎づけられてゐるわけではなく、いづれかといへば機械論的な仮説のうちにその諸々の支柱を求める論証の仕方に対応するものなのである。矛盾が、心の強引な緊張がこの教説を呼び上げたのであり、諸力の均衡から調和的に生れてきたものではない。この間の消息を感得する人は、ニイチェがこの宇宙像の成果として平安を、また前進と停止との交替におけるリズミカルな確実性を収獲できなかったことを怪しむことはないであらう。数学的に厳密に最後の原子結合にまで及ぶ「永劫回帰」を説くニイチェは、にも拘らず、永遠のプラトン風理念、うつらふことなきノルムを決して認容してはゐない

のである。変転の法則が、断じて常住のものでないとすれば、いかにして永遠の等しさは考へられるであらうか。ここに見通すことのできぬニーチェの破調もあった。

ニーチェにおいては往々みられるところであるが、論理的説明としては破綻してゐても、劇しい有機的生長の見地に立てば十分有意義と思はれる彼の見解の変転のめまぐるしさと諸々の矛盾に煩はされるのは、やはりニーチェの心を汲みかねるところから来るものといつてよからう。もとより矛盾はあくまで矛盾であり、ニーチェの姿の痛ましく、毀れた部分であり、克服されなかった苦悩の表示ではあるが、たとへば、その最深の衝動によつて、法則喪失の時代に再びノルムを贈与するように、否、自己自身がノルムとなるように駆り立てられて止まなかったニーチェは、しかもなほノルムのイデーを駁撃するといふやうなことも、その矛盾の一つとみられる。プラトンに対する衷心の畏敬の情にも拘らず、その心のうちに深く嫉妬心を燃しつづけてゐたニーチェは、凡そノルムなるものが、いづれもプラトンの性格のものであるといふことで、どうしてもこれに反対せざるを得なかったやうである。

ニーチェのプラトン批評や非難には誤りが多く、歴史的にみて重視するには当たらないが、問題となるのは、彼の著作、彼の人間態度はノルム問題に対してどのやうな関係に立つか、といふことである。蓋しそれはニーチェ―プラトン関係の核心でもあり、そこに史的問題以上のものが示されてゐて、ヘプラトンかニーチェか (Platon oder Nietzsche?) といふ問題は、ヘノルム理念か混沌かの問題に外ならず、ニーチェ没後すでに四分の三世紀以上に亘つて、益々架橋しがたく恐るべき裂目を白日のもとに露呈してきてゐるからである。

大観すれば、ヘ永劫回帰の教説は、ニーチェにとって科学的証明の可能不可能、矛盾撞着の有無の問題ではなく、不可避の窮境を転回せんとする意味で、すなはちヘ必然性 (Not-Wendigkeit) を何らの留保なしに受容せんとする意味でニーチェ風のヘ運命の愛 (Amor fati) の逆説的表現として受け取らるべきものであるだらう。その生涯が余りにも苦渋にみちたものであり、彼をかこむ現実の矮小と嘘偽と醜悪と卑陋に常住に嘔吐感を抑へきれなかったニ



チェは、まさにそれゆゑにこそ生粋のプロテストアント氣質から、細部に到るまでの同一物の永劫回帰を敢て意欲し、劇烈な嘔吐発作の反覆のうちに嘔吐そのものを根絶し、かうしてカタルシスの境地に達しようとしたもので、クラアゲス風に言へば、〈永劫回帰〉の教説は、その際、唱へられた呪文のやうなものと考へておいてよいであらう。

〈永劫回帰〉構想の一応のシェーマは「ツァラトゥストラ」や後期遺稿などを抛りどころに描き出すことは可能で、幾多の研究者によって試みられて居り、今更それに触れて震撼される人もないであらう。しかし「ツァラトゥストラ」第三部の「快癒しつつある者」の章に描き出されてゐること、すなはちこの恐るべき思想を深淵から呼び上げようとして容易に決意し得ず、遂に覚悟の臍をきめて、この秘密を白日のもとに曝し得たときの言語に絶した歓喜、しかもそれに続く劇しい嘔吐の発作に伴ふ悶絶、回癒に向ふ七日の間、一切の飲食を受けつけなかったといふあのくだりを読むとき、さらに後年に到るまで、それについて語るときはいつも、恰も口外を厳禁された秘密でも洩らすかのやうな恐れを示したといふ友人たちの証言を思ひあはせるとき、それはあくまでニーチェの実存をその深奥において震盪した痛烈な体験であつたことを感ぜしめられるのである。

ところでもしニーチェが―可能法的言ひまわしには要心が肝要なことは承知の上で―原水爆による地球絶滅の言語に絶した惨状の予感が深黒な密雲として全人類の頭上に蔽ひかぶさつてゐる現代まで生き延びてゐたとすれば、それでもなほ彼はこの構想を全面的に肯定し得たであらうか。私たちは敢て推測する、そのやうな恐るべき極限状態にあつてもニーチェは必ずやこれを肯定したであらうと。蓋し「快癒しつつあるもの」の章に描かれたツァラトゥストラのパートスの劇しさは、十分それにふさはしい濃度をもつと考へられるからである。

〈永劫回帰〉の円環運動は、客観的シェーマとしてこれを傍観すれば悠久なる時間の流れのうちにに行はれるものであり、一切の存在者は鋼鉄のやうなこの大円環のうちに脱出の余地なく閉鎖されながら、直接の対決を迫られなければ、それと気付かぬものであるかも知れない。また老大な自重を以て自転する円環運動の必然性も、全くそれに盲目

なものにとっては、何ら恐るべきものではなく、平然としてその傍を通りすぎ得るかの感を抱く程度のものかも知れない。

しかし個々の実存が、断乎たる決意においてその恐るべき面貌を熟視し、直接対決の場に臨んだらどうか。それまでは客観的シェーマとして、把握しがたく宏大無辺な、したがって重圧と拘束力の点でも、ゆるやかなものに眺められたこの大円環は、突如、不可思議にも無気味に蜷局とぐろを巻く黒く重き一尾の怪蛇と化し、恐るべき鎌首を抬げて、人間目がけて風を切つてとびかかり、たちまちその咽喉笛深く喰ひこんでしまふのである。そして一旦、喰ひこまれた以上、口外に重く垂れたその蛇身は、逆立つ鱗のために、人力を以て抜き去ることはもはや、不可能である。

ここに、怪蛇と化した「永劫回帰」の円環と人間実存との凄惨な死闘が展開される。人間のはまり込んだのは、脱出の途なき極限の窮境である。ここにこの恐るべき怪蛇は、人間実存を内外から纏繞し、脊椎も砕けよと、刻々にその締めつけを強めてゆく。そして暗黒な深淵の底までそれを捲きこんでしまふ。しかしこの怪蛇もまた、その力の象徴ともいふべき円環を解いた姿で人間の口中に深く喰ひ入った以上、同じくその死力をつくしてゐるのである。人間実存が怪蛇を噛み切るか、怪蛇によって人間が噛み破られるか。ツァラトゥストラの渾身から迸る励声に応へてかの牧人が、遂にこの怪蛇の頭部を噛み砕き、それを遠く口外へ吐き飛ばし得たとき、彼はいまだ何人も咲ったことなき咲ひを咲った、と「ツァラトゥストラ」に記されてゐるが、ここに黒い蛇の頭部を噛み砕くといふこの象徴的行為の意味するところは、おのづか自ら明かであるだらう。

確実に予想される原水爆による可能なる惨状の一切を含めて、矮小と汚辱と慚愧と痛恨とにみたされたすべてが、無始から無終へ流れる時間のうちに、微細の点に到るまで永劫に回帰することの肯定、——これは測り知れぬ大宇宙の片隅に委棄された人間実存が、絶後に蘇生せんと願ひをこめて、敢て絶望的虚無感のもとに居直り、底知れぬ虚無の深淵を底の底まで究めつくすことによって、虚無そのものを無化せんとすることであり、ここまで来て漸くへ永

劫回帰のこの大渦流は、その旋渦に人間実存をのせたまま劇しく再びこれを捲き上げ、そこに始めて闊然たる蒼空を仰視せしめる。すなはちいまや〈Not〉は wenden され、法爾自然の〈必然性 (Notwendigkeit)〉として照覚される。

ツァラトゥストラは〈意志 (Der Wille)〉を規定して〈Not〉の〈Wende〉としてゐるが、〈Not〉を転回するその〈意志〉が〈私の必然性 (meine Notwendigkeit)〉なのである<sup>(5)</sup>。

一応、傍観するものの瞳には、人間実存の矮小な意志など、巨大な〈永劫回帰〉の円環に比すれば、全く取るに足らぬものと映るであらう。しかし傍観者の態度を決然と一擲すれば、あたかもかの極微の原子核がその分裂に際して老大なエネルギーを放出するやうに、窮境回換の必然性としての主体的実存の意志は、〈永劫回帰〉の巨大な円環に内面から応和する偉大な威力を発揮するに到る、過去において実存が体験し、現在、体験しつつあり、未来において体験するであらうあらゆる境位は、実存がそれを意志することによって必然となったのであり、必然となりまた成るであらう。このことの照覚に達すれば、生の一瞬一瞬が永遠性の光芒のうちに眺められ、人は己が運命を愛するようになる。ニイチェの〈運命の愛 (Amor fati)〉もここにその最深の根柢をもつものと言ってよからう。ここに取返へのつかぬものとされた〈過去〉に対する痛恨と、そこから生ずる〈怨恨感情〉や復讐の情念は完全に清祓され、人は自己を超越して、すなはち自己以上のものに包越されてゐることの照覚において―仮りにニイチェ風にいへば、〈超人 (Der Übermensch)〉への第一歩を踏み出したことにもなるのであるであらうか。

余りに齒切れのよいとはおもへないこのやうな言ひ回しについて、ここに多少註記風に敷衍しておきたいと思ふ。ここでまづ考慮されたいのは、私たちはその一人々々が〈個体的〉にして、超個体的、実存であるといふことなのである。ところでこの〈超個体的〉は、それぞれの個体が自力的な自己克服によって達成されるといふ種類のものではない。個々の個体は、本来、決して孤立したものではなく、超個体的次元に根差すところの他力的存在でもあるといふ

ことを意味する。しかしニイチェの〈超人〉はそのやうなものではなく、不断の超自己的な前進の無窮の彼方に標置された人間存在の極限理念であったやうに思はれる。

ところで自力的転回がその極限においてそのまま他力への転回を遂げるといふこともあり得るかも知れない。試みにあの有名な〈三段の変化 (Von den drei Verwandlungen)<sup>(6)</sup>〉についてそれをみれば、まず駱駝として他力随順の〈Du sollst〉に甘じた精神はやがて絶対自力の主張者として〈Ich will〉を咆吼する獅子に轉身するのだが、この獅子はその猛獸性発揮の極限において、忽然として小児への轉身を達成する。彼の根原語 (Urworte) は、〈Ich bin〉であるだらう。小児は「天真 (Unschuld) であり、忘却である。それは一個の新しき開始、一個の遊戲、自転する一車輪、一個の第一運動、また一個の肯定である」とツァラトゥストラはいふ。かつて信田正三氏は本章に關説して駱駝から獅子への変化には、意志の他律から自律へといふ同一次元での一つの連続性がある、しかし獅子から小児への轉身には、主体的な意志自体の立場が全体として空じ去られるといふ一つの非連続の断絶が介在する<sup>(7)</sup>といふ見解を表明されたが、私たちは俄かにそれに同調しがたいものを感じる。蓋し小児においては、〈Ich〉は空じ去られるどころか、獅子とはまた別趣な意味で小児こそまさに〈自私〉の象徴であるときへ考へられるからである。このことは母親に手を焼かせる小児の我儘を考へてみれば直ちに納得される筈である。小児が、一見、〈天真 (Unschuld)〉であるやうにみえるのは、決して〈善惡の彼岸〉に達したからではなく、〈混沌未分〉の存在として善惡識別の手前にあるからである。したがって〈自私〉の完全に空じ去られる人間存在の至境は、〈Ich bin〉を主張する小児ではあり得ない。そこにおいては〈自私〉そのものが跡かたなく空じ去られなければならないだらう。

ところで仮りに、〈Ich bin〉から〈Ich〉を消去したら何が残るか。字面だけに限定すれば、もちろん〈Bin〉であろうが、〈Bin〉はすなはち〈Ich bin〉に外ならぬとすれば、〈Ich〉が空じ去られれば、〈Bin〉そのものは不定詞〈Sein〉のなかに吸収されることにならう。それなら人間実存はザインに対してどのやうに脈絡するか。ここにハイ

デガ哲学の根本視点が据えられてゐることはすでに周知のとほりである。

ところでハイデガーにおいても〈Ich〉は〈Sein〉に無媒介には連り得ない。それは一応〈Dasein〉として規定され、そして彼はまづこの〈da〉の現象学的分析から出発するのだが、今更、ここにそれについて詳説するにも及ばないであらう。とまれ〈Dasein〉は何ものとも知れぬものによって〈投げられたる (geworfen sein)〉存在である。ここにニーチェにおいては隠くされてゐた人間存在の受動的、性格が始めて露呈されてくる。しかしハイデガーの視線も、更にその奥へは達しなかった。日本に生を受けたものとして私たちは、ニーチェの〈Ich bin〉もハイデガーの〈geworfen sein〉もともに超えてさらにその奥へ到らなければならぬ。ニーチェの〈Ich bin〉はもっと本来的に言へば〈Ich bin geboren〉であり、したがってハイデガーの〈geworfen sein〉は〈geboren sein〉と書き改められなければならないだらう。ここにこそ日本の生哲学の核心があると思はれる。

### 3

ここで、プラトニーアリストオテレスを源流とする西欧形而上学が、その発端から既にニヒリスムスの萌芽を蔵しさまざまなエポックを経歴しながら次第にその神学的性格を脱してゆき、デカルトといふ決定的回点を経て次第にドイツ観念論に登りつめてゆくといふこと、すなはち主体の立場から表象作用を駆使して一切の客体を対象化してその生命を奪ひ去り、これを主体のなかへ貪慾に繰り入れてゆくことを企図したとみへるデカルトの道をニーチェは辿りつくして、一切の存在者の根本性格が〈力への意志 (Der Wille zur Macht)〉であるといふ形而上学的設定へ達したといふこと、かくてたとへばポズィティーフなものであれ、ニヒリスムスの完成者となった以上、ニーチェはその克服者ではあり得ないとするハイデガーのニーチェ論は、その論程に揺ぎなく、ここに独自のタッチを以て描き上げられたニーチェ像は千頁に亘り、精緻を極めたもので、それはそれとして一切の抗議を撥ね返すいたたかきをもつもので

ある。

ニーチェがこのやうな面貌をもつことは確かに動かせない事実で、しかもハイデガーがこのやうなニーチェの姿をかくも精緻に刻み上げてくれたことは、まさにそれによって私達にかかるニーチェへの関心からの解放を可能にするもので、ハイデガーの多年の辛勞に心から謝意を表せずには居られない。しかしニーチェにはそれに劣らぬもう一つの重要な面貌がある。ハイデガーのニーチェが西欧二千年の過去を睨んでいるに對し、こちらは茫漠たる未来を遠望してゐるやうな趣のもので、ハイデガーがほとんどこの間の消息に触れ得なかったところに、私たちはやはり彼の哲学の限界を予感せざるを得ない。以下、少し視点を變へて、未来にその顔を向けてゐるニーチェについて、いささか素描を試みよう。

デカルトのかの有名な命題〈cogito ergo sum〉は独訳では〈Ich denke, also bin ich.〉となるのだが、これはニーチェ風の端的な〈Ich bin〉とどのやうに脈絡するか。ここにニーチェはデカルトの命題から〈Ich denke〉を鋭く削ぎ落してしまったやうにみえる。いささか南泉斬猫を想はせる〈Ich denke〉のこの斬却に際して、副詞的接続詞〈also〉は姿を消し、〈Ich bin〉だけがくっきりと浮び上る。ここに私たちは遂に二千年に亘る西欧形而上学の支配から決定的に脱出したニーチェの姿をみる想ひがする。たとへ〈Ich bin〉が人間実存の至境地ではないにしても、そこからハイデガーにはみえなかったニーチェのもう一つの顔がみえて来はしないであらうか。〈永劫回帰〉といふ恐るべき宇宙諦視の原理を踏まへて主体的肯定の域に高昇したニーチェにとって、この回帰の円環は、もはや彼を閉鎖して放さぬ鋼鉄の輪ではあり得ない。あくまで彼は、「随处に主となれば立処みな真なり」の臨濟風の意志本来の力を貫いてゆかうとする。一見、固定し転回不可能にみえる過去も、実は個々の主体がそのやうに欲したがゆゑにこそ、さうなのである。主体的実存の関与する一切の現実は、つねにそのやうな自由と必然との弁証法的綜合の上に築かれてゐる。それならかの〈偶然〉と称せられるものは果して何であらうか。

〈偶然〉はドイツ語では〈der Zufall〉といはれる。これは実に含蓄深い言葉であると思はれる。〈凡そ偶然的なもの (Das Zufällige)〉は、原因不明に〈人の身にふりかかってくるもの (Zu jemandem Fallendes)〉だからである。ところで落下は引力によって生起する。すなはち〈偶然 (der Zufall)〉とは、実はその人に内在する引力にひかれて、その人の身に降りかかってくるものである。したがって、一見、この〈降りかかり〉が、その人に全く無縁にみえようとも、眼にみえぬ引力によって作用された結果であると考えてもよいであらう。深处にひそむこの引力は、すなはち個々実存の究めがたくも縦深なる系譜複合によって幾重にも媒介された〈意志〉であり、〈意欲〉である。このやうに考へれば、〈偶然〉と称せられるものは、善きにせよ、悪しきにせよ、人間実存に関する限り、一層深邃なる意味において、やはり一種の必然と考へられるものではないであらうか。

実存の意志の必然性が、〈偶然〉の實在的根拠であることの消息に深く契合すれば、一切の有為転変、森羅万象のことごとくが、運命的必然なることの照覚において、人の心は自らコスモスおのづかへ向って闊然と開かれ、宏大な天地のなかで一個の無邪気な童子と化し、心境双忘の楽しき遊戯三昧の次元に摂取される。ここに〈永劫回帰〉の宇宙的必然性は、個々実存の意志の内面的必然性に応和し、やさしくこれを包越する天蓋となる。個々実存の意志の必然性も、実はそこから〈schicken〉されたものだったのである。圧倒的に実存を襲撃するかにみえた〈永劫回帰〉の鋼鉄の如き必然性は、実は怯懦なる傍観者の恐怖心の所産にすぎなかったことが自覚される。ツァラトゥストラのいふやうに、〈死をも撲殺する勇氣<sup>(1)</sup>〉を以て、かの黒く重き蛇の頭を噛み碎き得て、「かくの如きが人生なりしか、よしさらば今一度！ (War das das Leben? Wohlan! Noch Ein Mal!)」といふ決然たる叫びをあげ得たとき、〈永劫回帰〉の恐怖すべき巨大な円環は、コスモスの宏大無辺な天球のうちに姿を没し去ったのである。

象徴的に表現すれば、ツァラトゥストラの鷲の頸部をゆるく捲く蛇―天日のもとにおいて最も聡明なるこの動物は、かの黒き怪蛇の生れ変りであり、今はツァラトゥストラの〈使ひ女〉として、従順にその主人に伴ふ。但、これを自在に駆使し得るためには、人は、たとへ〈超人〉の至境に達せずとも、ツァラトゥストラに等しく、すでにその方向にむかつて一次元を高昇したものであらねばならぬ。そのとき彼は、平然としてこれをその腕に絡らせて持ち運び、ときに俊才とみれば、その身体に絡らませ、骨をも砕く劇痛に堪えさせてこれを選抜しようとする。また彼は、ときには天穹を悠々と飛翔する大鷲にも比定される。彼は〈永劫回帰〉の深奥なる智慧を象徴するこの蛇を、ゆるく頸にからませながら、高く蒼空に〈舞ひ〉上る。深淵と大地はいま彼の眼下にある。深淵はもはやそのうちに彼を閉鎖しておくことはできない。ツァラトゥストラにおいては〈深淵と高頂〉とは一体となつてゐるのである。<sup>(2)</sup> 今や彼は、大地とその内懐<sup>うちふところ</sup>に蔵された深淵を眼下に臨み、頭上高きにあつてそれらを抱擁する穹窿を仰ぎ、限なく天日に照射された蒼穹のなかを悠々と飛翔する。すなはち彼は今や大宇宙のなかへ放たれたのである。ツァラトゥストラが大地の意義<sup>(Der Sinn der Erde)</sup>を強調するとき、人は大地自体だけを考ふべきではないであらう。ツァラトゥストラの、ニーチェの大地は、天日に照らされた大地、天日とともある大地なのである。上に天日輝く蒼穹を頂ぎ、下に深淵を蔵する大地を抱擁するものは、すなわち〈Kosmos〉として、もはや単なる〈Kreis〉ではなく、渾然たる〈Kugel〉であり、〈永劫回帰〉の円環はこの渾球に攝取されてその姿を消し去るであらう。二千年の久しきに亘り、キリスト教といふ瘴癘の氣に包まれて、ハイデガーのいはゆる〈存在忘却 (Seinsvergessenheit)〉のなかを彷徨しつづけた西欧にあつても、偉大なゲートによってコスモスへの展望は漸く開かれ始めてゐたが、ニーチェは独自に辛酸多き楷梯を登りつめ、さらにその先の展望を可能にする望楼に達したかのやうに思はれる。

まことにニーチェはヤームスの存在である。西欧二千年の過去を大観し、その帰趨を一身に収約した完璧なニヒリスト・ニーチェには、それとはまた別に人類の未来に向けられたディオオーニュゾスの哲人ニーチェの顔があつたので



ある。この双つは全く異なるやうにみえながら、表裏開合、幽顕出入の関係をもつやうなところもあり、それによってニーチェの思索や観想にも微妙な纏れと陰影が錯綜し、彼の難解性の重要な部分もそこに由来してゐるのであるのだが、ともかく彼が双つの面貌をもつといふこと、そしてディオオーニュゾスの哲人としてのニーチェの解明が、今後のニーチェ研究の核心をなすべきことに疑問の余地はないであらう。拙著、「若きニーチェの識られざる神」はそのためのささやかな序論の意味を有するものである。

## B 〈超人 (Der Übermensch)〉

### 1

〈永劫回帰〉神話にみられる宇宙像の鑄造に際して示されたニーチェの心の緊張が途方もないのであったやうに、第二の教育神話〈超人〉においても度外れの課題が示されるのである。

時代の〈進歩妄想 (Der Fortschrittswahn)〉、客観的実用倫理に対してツァラトゥストラは人格の内面的豊かさを開示する。しかしツァラトゥストラにはプラトンの確実さと揺ぎなさとは欠けてゐる。それに不安を覚えたものであらうか、ニーチェは〈超人〉の理念を遼遠な未来へ向って昂揚させる、あたかもこの昂揚なしには、自己自身を確保し得ぬかのやうに。かくて彼は〈超人〉の主権確保のために戦ひながら、遂にイデー一般を覆没させてしまふといふところまで暴走する。新たな倫理を求めながら、道徳のイデーを拒否する。これは危険な矛盾であり、ゆき過ぎである。彼は自己のうちに最高のもの、ノルムを生むことを欲する、それゆゑに彼にとっては彼を除外した神の観念は堪へがたいものとなる。彼は神を拒否する。かくて彼は神を信ずることもできず、しかも、自身、神らしくないといふ不幸な自覚に悩むのである。彼の標置するところは高きにすぎた。したがって自己を跳び超えようとする緊張は極度の強

さに達せざるを得ない。それぞれの時代に唯一人にだけ与へられる人類の最高段階に到達しようとして、ニーチェはプラトンが既にそこに立ってゐるのをみた。そしてプラトンと同じ高さに達し得てゐない、といふ認識は彼には堪へがたかった。かくて〈超人〉理念をかざしてそれを跳び超へようといふ氣を起したとき、彼はすでに〈傲慢(Hybris)〉に墮してゐたのである。そして〈ヒュブリス〉こそ古代悲劇のヘーロスたちを没落の深淵に埋没せしめた当のものであったが、それに親縁な悲劇的陰影がニーチェの身辺を色濃く包みはじめた。不可能を可能にせんとする劇しい痙攣的意欲、それもあの時代の西欧においては一度<sup>ひとた</sup>びは試られなければならなかったものかも知れない。

プラトンの著作の美しさは、その最奥の焰の核心から輝き出てくる。エーロスに飽和された詩作の焰と、論理的探究の光は、至福なものとして直観されたイデーから、うつらふことなき神的存在への瞥見から滾湧してくる。この神的存在へプラトンは独自のエーロスの焰に包まれて近づかうと努めるのである。

プラトンが呼びかけてゐるのは〈神々しき御身(Das göttliche Du)〉であつたが、ニーチェがあらゆる迂路を通りながら、〈超人〉の理念を封じこめようと求めたものは〈神々しき自我(Das göttliche Ich)〉に外ならず、かくて彼は猛禽に似た嶮しい飛翔を続けながら、遂に限界の鉄格子にぶち当たって頭部を強打することになる。

ツァラトゥストラの遺稿を読むと、ニーチェが最奥の目標について心奥の想念やその使命への信念を吐露する場合、プラトンを尺度に自分を測定してゐることがわかる。人間神化、肉身の神化といふ彼の最も稔り豊かな思想を、ニーチェはプラトンにおいて再び見出す。プラトンに対する彼の攻撃など、凡そ無意味であることを内心よく知つてゐるのである。「プラトンは彼の哲学以上の意味をもつ。……私たちの身体は私たちの精神よりも賢い、ソクラテスは善悪についての懐疑的思考においてはプラトンよりも賢明であつた。しかしプラトンの方が一層高次の人間を現示してゐる」<sup>(1)</sup>。

極めて純素な現存のままに神々の寵児であり得る、といふゲーターヘルデルリン風の信頼感はツァラトゥストラ

には欠けてゐる。ツァラトゥストラ自身は、言はず語らずのうちに、このままでは神々しいものの容器ではあり得ないといふ意識に悩まされてゐるのである。彼が、〈超人〉への橋梁ともいふべき〈子らの国 (Das Kinderland)〉についてしばしば語るのもそこに由来するものであらう。<sup>(2)</sup>

## 2

古代への熱狂においてニーチェが示したものは文学的内至浪漫的衝動ではなく、要素的に止みがたい活動衝動であつた。彼は古代文化に特有な、肉身の神化としての〈具身性〉といふものを強く感じとり、同時代人の精神生活にそれが欠けてゐることに苦痛を覚える。それ故に、それを取戻さんとする不可能な課題の限界に追ひつめられ、突如ヒュブリスの深淵へ顛落してゆくといふ彼の運命もまた典型的に古代的なのである。確実な本能を以てニーチェは、プラトンにおいてではなく、エムペードクレスにおいて、——合体してツァラトゥストラと一体となる神話的形象を看取する。エムペードクレスは神を無みしながら、コスモスの諸法則を破開し、単なる仲保者に甘んぜず、自己自身を神に昂めようとした古代的ヒュブリスの最高の体现者として、まさに〈超人〉型の存在であつた。ツァラトゥストラの終りの方の三巻の計画を点検すると、ほぼ、ニーチェの意図が察せられる。しかしニーチェにはこの神話を造形する力が不足してゐた。草稿は〈祭祀〉の必然性についてよりも、浪漫的な詩作の仕方について証言するものの方が多いのである。エムペードクレス・ニーチェが、その運命をへヒュブリス〉のうちに終結する時期はまだ熟してゐなかつたのであらう。彼はツァラトゥストラの完成を諦めた。

## 3

その挫折のあとでもニーチェは、なほ彼の現実感覚の健在を示しつつづけた。すなはち彼はノルム形象の輝きを、自

己自身のなから放射することができなかったので、彼の作品を準備するための前提諸条件を、現実の世界において探究するといふ作業に献身する。詩人として、神の造形者としてはニーチェの力は及ばなかったとしても、ツァラトゥストラ時代に収めた成果はその価値を保持しつづけた。すなはち彼は、不真なものとなり、また真正ならぬものを拵へつづけながら、依然として勢力を振ってゐる旧道德の裁き手としての任務はどこまでもこれを遂行しつづけるのである。「善悪の彼岸」と「道德の系譜学」の二つで彼はいはば判決の基礎づけとその仕上げを行った。しかしこれで彼の任務が完遂されたと認めるにしては、裁断者としてのニーチェの天職についての見識は余りに高きに過ぎた。彼はなほノルムそのものを具身的に現示することはできなかったが、これをその方向において指示することはできた。

〈方向指示 (Richtung)〉といふ姿で〈裁く (Richen)〉といふこと、単に否定するのではなく、新しい諸価値を定立する意味で評価すること、これがいまや彼の課題となる。すなはち「一切価値の改価 (Umwertung aller Werte) である。その諸々の対話篇でプラトンがすでに同じ作業に従事してゐることをニーチェは見出す。「国家篇」<sup>ポリタイア</sup>でニーチェは、一瞬も彼の念願をはなれぬ〈天才の産出〉のための機構の精彩にみちた設計図を看取したのである。

裁断者としてのニーチェの任務は、高次の人間を産出せんとする彼の任務の一面にすぎない。プラトンもすでに崩壊へ向ふ時代情況の中に立たされてはゐた。しかし新たなイデーによって制御されて、協同体としての新たなポリスを形成する力のある人間たち、実体ある具身的個体はなほ種切れにはなつてゐなかった。彼の雄渾な「国家篇」もそれに勇気を得て構想されたものであったらう。逆にニーチェが眼前に見出したものは、繁栄した、ことによつたら繁栄しすぎた国家であつたが、それは、皮肉骨髄を具へてゐた筈の人間たちからその髓をぬきとり、それをゲゼルシャフトとしての政治結社を維持するための単なる素材に化してしまつてゐた。すなはち、そこにみられたのは、もはや本能のゆるぎなきに生きる人間たちではなく、混迷し、荒れすさんだ幽霊のやうなものたちにすぎなかった。ニーチェはこのやうな人間たちのなかにもなほ、微かに息づいてゐると思はれる最深の本能的要素を淨め強化するといふ無

限に困難な課題に直面したのである。

ニーチェの未来構想はプラトンの「国家篇」と等しく、よくユートピアといはれるが、だからといってそれが単なる浪漫的夢想ととられてはならないだらう。また他方、ニーチェが生理学的諸原理の援用に頼りすぎているところをみて、その自然主義が云々されることがある。〈力への意志〉も〈超人〉も、ともに、一面、当時の自然科学風の想念に由来する迷想を含まぬわけでもないが、ニーチェの視座が、あくまで心身の統合といふ意味における〈身体性〉の実現に向けられてゐたといふことは忘れられてはならないであらう。彼の人間像、世界像が完璧な成熟に達しなかった理由はもっと深いところにある。いかにニーチェが彼の理想を遙か高く〈超人〉にまで昂めあげても、また単純な人間たちを賤民とか奴隷とか貶しつけてみても、彼はプラトンの高さには達し得なかった。その「国家篇」でプラトンが示したあの宏量、すなわち、各身分階層のそれぞれに、それにふさはしい任務を割りあてたあの宏量と慈念とはニーチェには欠けてゐたのである。

### C 〈力への意志 (Der Wille zur Macht)〉

#### 1

ニーチェの人格における損壞箇所は、彼の体系的教説のために計画された結論ともいふべき〈力への意志 (Der Wille zur Macht)〉において最も明かに曝露されてゐるといってよからう。彼は単に生理学的な、自然科学的な法則を過度に重んじてゐるだけではなく、痙攣ともみえる過度の緊張において遂行された〈自己克服 (Selbstüberwindung)〉を以て、みづから彼の英雄的意志の根幹にゆさぶりをかけてゐるのだ。すなはちその懷疑的相對主義を以て、彼自身のうちに深く隠くされて成長しつつあるその独自の規範理念を自分の手で解体させるのである。

ニーチェが幼年時代から大法則を求めつづけてきたこと、しかし一面プラトンに対する妬心もあり、また余りに尚早に円環を完結させることに対する危惧もあって、プラトンのイデー一般を拒みつづけたことは既に述べたが、後期のニーチェにおいてこの態度は一層その厳しさを増すのである。しかし私たちにあって、あるひは教説として、あるひは形姿として現象世界に現れてゐる諸々のノルムに、相対的な個人的残余が含有されてはゐても、そこにはやはり永遠のノルムへと人を赴かせる絶対的な核心が封じこめられてゐる筈である。もしさうでないとすれば、私たち後世の人間が史上のさまざまな時代のヘローエンを、それぞれヘーロスと感じ、その価値に応じて比較することがどうしてできようか。生命ある世界像を界限する円周を、気の赴くままにいかに遙かな彼方まで拡大してみても、凡そ人間に本具の種質といふものに根本的な変更のない限り、円の中心は動かし難く与へられてゐる筈である。創造的なものの領野における必然性のこの永遠の核心、そこへ向つての人間の宇宙的投錨が立法する力にその支柱を与へる。一人々々のヘーロスとは、それぞれ新しい棲家を建てるが、その静力学的諸法則は永遠である。ニーチェは超越的な神への憎悪から、制限を加へる力への危惧から、〈超成層圏〉風の世界など信ずることを欲しなかったが、プラトンは深く大地に根を卸しながら、悠然として屹立し、その頭部を遙か煙霞の中へ没してゐる。しかしニーチェは内在する神々を、永遠なるものを、現象のうちに観ること欲しなかった。

たとへ相対観が、ニーチェの運命と形姿を規定する一要素となつたとしても、そしてそれが私たちに一応際立つた印象を与へても、それは決してニーチェの人格の核心をなすものではない。むしろ不可能な課題に対し力及ばぬところに由来する不協和音をこそ、そこに聴きとるべきであらう。

ツァラトゥストラに先立つ時代にみられる懷疑主義と啓蒙作業とは、突破のための、すなはち浪漫派、ショーペハワー、ヴァーグナー、総じてキリスト教的後期ヒューマニズムからの解放と、その否定のための手段であつたが、価値改価時代の相対主義と実証主義とは、また別趣のことを意味してゐた。ニーチェは神域の門関に迫つて、これを叩

きゆさぶつてみたが徒勞であつた。ツァラトゥストラがプラトンの段階に登り得なかつたことを彼は痛切に思ひ知らされたのである。そこでニーチェはその比武の相手を躍り超えようとして、ソフィスト達と結盟する。それはもとより政略的に部分的な性格のもので、真の血類との結盟ではなかつた。ニーチェがその独自のエートスと認識の楽しさに身を委ねてゐるとき、彼はむしろ王者風の隠士ヘーラクレイトスに親近なのである。プラトンはその血と精神のうちにヘーラクレイトスとパルメニデスを結びつけながら、この両者を昂めた。ここでもニーチェは円を完結し得ない。彼は——学問的因襲に同調して、パルメニデスをヘーラクレイトスの極端な相反として把握し、パルメニデスに対すると等しくプラトンの〈理念論(Ideentheorie)〉にも目を瞑つてしまふ<sup>(1)</sup>。したがつて彼はヘーラクレイトスとパルメニデスといふこの二人の哲人から、この両者の完成者たるプラトンの次元に高昇することができず、この両者の追隨者たち、血と精神の随順者ではなく、認識論的諸命題の用益者たち、すなはちソフィスト連のところまで迂りおちてしまつたのである。

イデーに対するプラトンの山をも移す信念、美しく完成され的確に界限されたこの宇宙——これこそ永遠の不調和に悩むニーチェをおびぎ、寄せまた突放した当のものなのである。彼はあらゆる理念論を、吸血鬼のやうなものとして呪つてゐるが、もとよりそのやうなことで結着のつく断ではない。ニーチェ独自のあらゆる所願と希望の目標であつたものが、プラトンのうちには鎮座してゐるのではないかといふ仄かな予感がニーチェの心に萌し始める、「要するにすべての哲学的イデアリスムスは病氣のやうなものであつた。それがプラトンの場合のやうに豊かすぎて危険な健康状態の用心、度外れに強力な感覚に対する恐怖、賢明なソクラテス派の抜け目なさ、といふものでなかつたとすれば——恐らく私たち近代人はプラトンのイデアリスムスを必要とする程十分に健康ではないのであらうか？また私たちは感能を恐れない、なぜなら——」<sup>(2)</sup>。

極めて断片的で真中辺に割れ目が目立つが、この観想は遺稿のどこかに残されたものではなく、全く良心的なスタ

イリスト・ニイチェの仕上げの済んだ著作、「楽しい学問」の第五巻として「善悪の彼岸」のあとで書かれた（一八八六年）部分、「私たち恐怖に無縁なるもの」のうちに見出される。ニイチェが黙蔵することも、脱臼に語ることもしなかったこの観想は恐らく彼の最も深い秘密を含むものと考へてよいであらう。

〈余りにも豊かで危険な健康状態にあるプラトン〉——これはもはや、古代頽廢時代に属する犬儒者の類ではなく、まさにディオオーニュゾス風の生の裁断者としての哲人なのである。いま、〈何となれば (weil……)〉以下を推察によつて補つてみれば、「何となれば、私たちには健康な血が欠けてゐるから、身体のためにツァラトゥストラのお説教を必要とするのだ。もし私たちが身体の面で息災であれば、私たちにはツァラトゥストラよりもプラトンの方がふさはしい」といふ風にでもならうか。要するにニイチェは内心打ちひしがれたことを感じて、ここにプラトン風のヘーロスよりも手前にある自分のことを微言しようとしたのではなかったか。にも拘らず彼はプラトンの頭上からその王冠を打ち落さうとする妄想に再三再四襲撃される。

彼がソフィストの流儀にしたがつて、すなはち相對主義と実証主義を駆使してプラトンを攻撃するとき、彼は自身自身に対してもその矛先を向けてゐるのである。彼はプラトンを超えて建設しようとする。しかも、ほのかに予感し得てはゐても建設することのできない、むしろ建設することを欲しない独自のコスモスのうちに拘束されてゐることをひそかに恐れてゐるのだ。彼はマースと法則を定立したいのだが個体の無制約な自由を放棄したくもないのである。彼はその著作のうちに新しいコスモスの萌芽が結晶を完成するやうな兆候を呈すると、制動のきかぬ懷疑主義を發動して、理論的にそれをぶち壊してしまふ。彼は真理自体を、真実の概念を拒否する、あとには混沌以外何も残らない。これが〈超人〉における〈超〉の、また〈力〉を、より多くの力を〉への意志の遂にゆきつく涯なのである。

ヘーラクレイトスは堅固なものを拒否したが、運動と争闘のなかに混沌をみたのではなく、それを超えてノルムとしてゼウスを、〈火〉をみたのである。彼の宇宙的な威嚇の言葉——「蓋し太陽といへども〈ヘーリオス (ἥλιος)〉を踏み



こすことはないであらう。踏みこせば、ヘチケ(Dike—司直の神)の使ひ女たち、すなはち復讐の女神たち(Erinnyen)が彼をみつけ出すであらうから」、は後世の門弟ニーチェに対する厳しい訓戒とは考へられないであらうか。

## 2

〈力への意志〉にみられるこのやうな混沌たる自己克服と自己止揚に想ひを致す人は、それによつてニーチェは〈裁定者〉としての自己の任務を破壊したと考へるかも知れない。凡そノルムを認容しないものに〈裁断〉の道があるであらうか。しかしこのやうな疑問は人がニーチェの理論的な諸々の臆見にだけ注目し、それらの根柢にあるものをみないところに生ずるのである。極端に近代的意見を表明するとき、ニーチェが往々にして浮べるイローニッシュな微笑を人は見遁してはならない。彼は一つの新しい宇宙をその詩文に封じこめることのできたあのヘルデルリンではなかった。彼は自己を犠牲に捧げながら、これを擯斥すべき時代に向つて投げつけた一個真正の英雄であつた。

意識的にしろ無意識的にしろ、彼は諸々の有毒なニヒリスティッシュな臆見の乱戦場裡に身を投じ、自己自身をその犠牲としたのである。彼の血と精神のうちに未来の希望の存することを確信しつつ、またそれらの臆見の空しさを意識しながら。ハイデガーによつていささか冷徹に評価された〈徹底的ニヒリスト・ニーチェ〉はこのやうにして形成された。そのやうな乱戦場裡にあつて発射された言説の矛盾などニーチェ自身にとつて実はどうでもよいことであり、表面、彼の賛同を得てゐるかにみえる実証主義は、実は嘔吐を催すほど厭しいもので、〈Dasein〉の一義的にして単調な合理的図式への意志など没趣味の極としか思はれなかった。「人はそれ—Dasein—からその多義的な性格を奪ひ去らうとすべきではない。諸君、善き趣味が、——とりわけ諸君の視界を超え去る畏敬の趣味が、そのことを要求する。たった一つの世界解釈だけが正しいといふ主張、諸君が正しいと思ひこんでゐるところの、そしてそこでは諸君の意味で科学的に——諸君は本当は機械的に、と考へてゐるのではないか——探究され、研究がつづけられ得る世界

解釈―それは算数、計算、秤量、目に見、手に捉へること以上の何一つ許容しないのだが―だけがひとり正しいといふ考へ、これは精神病ないしは精神薄弱でないとすれば、遅鈍であり、単純極まることなのである」<sup>(1)</sup>。

いささか揶揄的表現を試みれば、機械的に科学的な世界解釈で事足りてゐる諸君―共産主義的イデオロゲンも例外ではない―は、「銀の簪、買うてもろた、お腹<sup>なか</sup>が太いとは知らなんだ」、といふ本邦俚謡に寓せられた「おぼこ娘」の同類といふことにもならうか。

## 3

要するに彼の言辭は表面はソフィスト風であっても、底流してゐるのは、逆のものなのである。彼はソフィスト達のやうに普遍的教養の教師ではなく、その意識的破壊者であり、啓蒙家ではなく、本能の讃称者であり、快樂主義者ではなく、新しき精神王国の準備者なのである。理論的效果に対する、ソフィスト的逆説に対するニーチェの嗜好、彼の〈背徳主義 (Immoralismus)〉そのものは、彼の最深のエートスから生れて来るもので、人はそこに極めて大きな彼の実直さを、すなはち真理の発見とか、ノルムの設定とかいふ問題を軽々しく扱ふことはすまいといふ厳正な意志をみるべきであらう。ソフィストはノルム輕視から主觀主義へ、ヘーロスへの畏敬喪失から快樂主義者へ、コスモスから混沌へ迂りおちてゆく。ニーチェのゆき方は全くその逆なのである。

〈力への意志〉に關説された諸篇についてみても明かであるが、ソフィスト風の諸々の評価の仕方とは全く無縁に、その遙か上方に、ニーチェ独自の根本格率の如きものが聳えてゐる。すなはち、人類の未來に対する責任感、英雄的態度の重視、裁定者としてのディオオーニュゾス、永劫回歸構想など、いづれも無制約の地盤に根差すものなのである。

幾多の意見においてまことにラディカルな自然主義者であるニーチェは、その意志においては、これまた美事な

反自然主義者である。蓋し彼は偉大な英雄的人間を欲してゐるのだから。一見矛盾にみえるこの双つの利器を自在に駆使して彼は、時代の単純な概念のお題目を爆砕する。

ニーチェの相對主義は相對主義のための相對主義ではない。その背後には諸々の見解の相對性を曝露して、まさに生そのものの無制約な妥当性を証明しようとする意志が、この最高価値を具身的に現示しようといふ燃えるやうな意志がひそむ。しかし幾分輕蔑されたこの戦ひで身をすりへらし、自分は最高価値を現示する形姿とはならず、またそのやうな形姿を同時代の人々の間に見出し得なかつたのは、彼の悲劇的運命であつた。そしてこの運命が、時代によつて彼に課された任務に由来する以上、その原因らしいものを列挙して、思想家ニーチェその人を裁定することは私たちの仕事ではない。それがニーチェの體驗においてどのやうな姿であらはれてゐるかを知れば十分であらう。

プラトンの哲学はエーロスに飽和されてゐた。否、エーロスと哲学とは彼において一体となつてゐた。ニーチェにも愛念は欠けてゐたわけではない。青年時代、友人たちへの愛情は強くまた稔り豊かでもあつた。彼は友人たちにおいて自己を、また自己において友人たちを敬愛した。マイスターとしてのヴァーグナーへの愛は自己の神聖な責務とさへ感ぜられた。しかしヴァーグナーへの信愛が失はれ、自分の手で自分の夢を實現すべき必然性を認識させられたとき、彼のエーロスは友人たちをこの峻しい道へ伴ひゆくほどに勁くはなかつた。その最高の登攀において苦惱にみちた孤独のなかに据ゑられたニーチェは、英雄的忍受者として、一切の道德的ポーズなしに、極めて靜かにその生活をつづけてゆく。かくて人一倍友情に敏感であつた彼は、友人たちを自己の背後に残し去つた。もし彼が余りにも強引に彼らの水準を抜き去りさへしなかつたら、友人たちが彼を敬愛しつづけてくれることは確信することができたであらう。しかし彼は人間の声がもはや耳に届かぬ精神の孤独のうちに音もなく入つて、極度に切りつめた生活を営んだのである。彼自身の言を藉りれば、〈大小屋の起き伏し (Hundestallexistenz)〉のうちに。彼は、彼の著作にほとんど市場価値を認めない出版業者の無遠慮に心擾だされ、出版費を支弁するために、僅かの資財を積み立てた。しか

し時代の趣味など意に介せず、いかなる苦悩にも屈せず、彼は、日々にたかまりゆく自己自身への要求と、彼の最高の生規準とを厳守しつづけた。彼はルターとともに、「ここに私は立つ、別の仕方は私にはできない」、と昂然といひ放つてもよかったであらう。

神学者たちがニーチェを、背徳者、反キリスト者と非難しても別に不思議ではない。しかし彼らといへども、キリスト教本来のエートスは、ニーチェによって最高の厳格さと深邃な帰依の心で生きられたことを否定することはできないであらう。この偉大な拒否者が、よって以て彼独自の格率に随順して生き、それを現示したこの無制約性こそ、彼を時代の英雄たらしめ、またその裁断者たらしめるものであり、ニヒリステンという白蟻の巨大な群によって空洞化された末期キリスト教に対する凄絶な断罪は、依然として私たちの心魂をゆるがしつづけて止まないのである。

しかし究極のことを彼は達成し得なかった。蓋しその独自の協同体を自己の周辺に結成することはできなかったのだから。その際涯を知らぬ認識衝動は、逞しい翼に乗って、美しい人間性の軌道から離脱した。かくて深強なエーロスに飽和された協同体において、〈神々しき御身(Das Göttliche Du)〉との道交のうちに、真のノルムの直観のうちに生きる道は永遠に閉された。彼はひたすら〈神々しき自我〉に生きようとして、痙攣的な激しい緊張の極、一瞬、自己受胎による分娩が遂げられたことを幻視する。これはいかにも〈反基督者〉ニーチェにふさはしく、まさに〈処女受胎〉に対する〈処士受胎〉とでも呼ばるべきものであらう。とまれニーチェはこのやうにして自己の分身ともいふべきツァラトゥストラとの幻想的〈Zweisamkeit〉に生きることになるのだが、この間の経緯が「高き山々の頂より(Aus Hohen Bergen)」なる一篇の詩において委曲をつくして歌はれてゐることは既に述べた。

しかしこの凍結した高処からニーチェは遂に帰路を見出し得なかった。友人たちや高士たちへの愛が消え失せたとみえた後は、自分の魂のためにさへも、彼は自己の究極のもの、心からの詠唱を贈ることはもはや、できなかった。残されたものはかの〈デイオーニュゾス・ディテュラムベン〉にみられるやうな自虐的叫喚だけであった。ヘーラク

レイトスのあの威嚇の言葉は遂に現実となったのである。

ニーチェは時代の裁定者として完成されなかった。蓋しまづその教説の点で。それらはなほ仕上げが済んでゐないし矛盾にみちてゐるから。次にその姿に於いて。蓋しそれは範とするに足る成熟に達しなかったから。しかしその破局においてさへ彼の運命は、真正なものへの眼眸を喪失しつくして、ひたすら市民社会の安楽を謳歌してゐた時代に対する致命的判決となつてゐる。もとよりニーチェはソクラテスやイエスと同じ楷梯にあるものではない。しかし彼を血の犠牲に供した時代と社会の無理解なる処刑によって、彼もやはり神話的人物の系列のなかへ据ゑられたのである。時代を眠りから呼び覚まさうとしたこの人を、せめて抵抗と憎悪によってならまだしも、精神の怠惰によって十字架にかけたといふ汚辱は永久に十九世紀の皮膚に付着してはなれないであらう。

## 4

西欧哲学の核心理念をなす〈意志 (Der Wille)〉とはすなはち、ニーチェによつて的確に刻銘されたやうに〈力への、より多くの力への意志〉に他ならず、あくまで力による制覇をその本質とする。―これは紛れもなく西欧的であり、〈成り成りて成る〉不斷の生成発展を世界観の核心とする私たち日本人の考へ方とは似而非なるものである。さざれ石が結びあつて成長し巖となるといふのは、まさに背理そのものであらう。しかし私たち日本人が敢てそのやうな希望と希願のうちに生きてゐるといふ事實は重要な意味をもつものではないであらうか。死を無視するのでもなければ、それから逃避するのでもない。死を包みこみながらそれを超えようとするのである。女神伊邪那美命を伴ひ帰らんとして黄泉の国を訪ねた伊邪那岐命が、メデューサの首を想はせる醜惡な女神の姿を目のあたりにして、憤怒するこの女神とその指揮下にある妖魅―黄泉醜女―たちから遁れ去らんとして、最後に〈黄泉比良坂〉で〈事戸を度〉したとき、一日に「千頭を絞殺さん」といふ女神の脅迫に対し「千五百の産屋を建てん」と応酬されたことは、免

かれ難き死の面貌をまともに凝視しながら、生を以て死を圧倒せんとする心意気を示されたものといへるだらう。〈永劫回帰〉の宇宙的必然性と、実存意志の内面性格としての必然性との、主体的決断に導かれた応和の確認において、一応、〈ヘブライーキリスト教的世界否定〉とは無縁なコスモスとしての宇宙へ向って解放されたニーチェは、しかし〈力への意志〉の設定において、西欧形而上学の宿命的な羈絆を遂に脱し得なかったのではないか。ニーチェの〈力への意志〉と、つねに前途に光明をのぞみつゝ、生を以て死を圧倒せんとする日本人本来の希願とは全く異質のものであらう。日本人は〈意志〉を設定しない。宇宙の法則を〈産巢日（結霊）〉の妙用に発する生成発展において確認し、これに随順せんとするのである。よって〈力への意志〉の究極の象徴化でもある〈超人〉の如き怪物を必要としない。ミクロコスモスとして、マクロコスモスへの応和のうちに生きようとするだけなのである。

ニーチェも、〈ヘブライー風にキリスト教的〉な宇宙否定と絶縁し、一応コスモス風のものの中へ身を放った以上、この方向へ進むべきが順当であり、その予感は無くもなかったやうだが、それを実現し得なかったのは何によるものであらうか。時間がなかったといふこともあったであらう。しかし問題はもっと外のところにあるに思はれる。

それは何よりも、小宇宙としての人間は、〈Natura Naturans〉としての〈大宇宙〉に無媒介に直面し得るものではない、といふ決定的な照覚にニーチェが達し得なかったところからくると思はれる。〈大宇宙〉はいはば〈類(Gattung)〉であり、〈小宇宙〉としての人間実存は〈個(Individuum)〉である。両者の媒介としてその中間に〈種(Art)〉が考へられなければならない。古代悲劇の探究に没頭してゐた初期のニーチェは臆気ながらもそれを予感してゐたやうにみえる。古代悲劇が〈ディオオーニュゾスのもの〉と〈アポロ的なもの〉との総合から生れたといふその発想においてニーチェは、そこに現在にいたるまで大多数の研究者たちがなほ想像してゐるやうに、美学的カテゴリーを考へてゐたわけではなかったであらう。ニーチェ初期の古代研究を詳密に眺めてゆくと、この両者は〈祭祀的なもの〉を構成する二大範疇として構想されたものなることがほぼ判明すると思はれる。周知のやうに古代悲劇は大ディオオーニュ

スィアに際し、ディオーニュゾス神に奉納されたもので、民主的公民館ないしヘルスセンターにおけるアトラクションの類とは全く性格を異にする。〈音楽の精霊 (Der Geist der Musik)〉としてディオーニュゾス神を仰ぎ、その祭儀に参加し、その教団に摂取されたギリシャ女人たちは〈Bakchae〉と化し、主神ディオーニュゾスの光被をうける。あるひはアポロを、あるひはアルテミスを主神と仰ぐ諸々の教団、そのいづれもが一個の〈Mezokosmos〉でありそれを媒介として始めて〈ミクロコスモス〉としての個体的実存は〈マクロコスモス〉の秘奥に参通する力を恵まれることになるのである。

初期のニーチェはまさにこの方向に立ってゐたと思はれるのに、その方向への直進を阻んだものは、ヴァーグナーとの疏隔、病気による教職の放棄に伴ふ寂寥や幻滅感とともに目覚めた鋭く根強い懷疑であつたらう。なるほど、旧来の〈ヘブライーキリスト教的〉世界否定との断絶はすでに決定的となつてはゐた。しかし密雲はなほ空に立ちこめ、方向の見究めを許さない。それを見究めるためにはあらゆることが試みられなければならない。相互に異つた、時には全く逆な多くの実験が行はれる。よつて〈Allzu Menschliches〉を以て始まる中期ニーチェの言説は矛盾の集積の観を呈するのである。しかしこのやうな常住の試行錯誤に堪えぬいて進むためには、心身ともに並外れた強靱さが必要であつたであらう。

たとへ密雲に蔽はれてはゐても、その彼方にはなほヘラスの太陽の予感があり、密雲をとほして彼の進路に落ちる微光は消ゆることなく、次第に輝きを増して〈黎明〉の光となり、〈楽しい学問〉の午前の光となり、次第にツアラトゥストラの〈大いなる正午 (Der große Mittag)〉へ近づいてつれ、〈ヘブライーキリスト教的西欧〉との断絶の意識は益々明晰さを加へ、遂に西欧二千年の精神史を真二つに爆砕するダイナマイトたる自覚に到達する。しかし、初期には眼前に髣髴してゐたらしい〈Mezokosmos〉の予感も消え、〈ミクロコスモス〉として、〈マクロコスモス〉に無媒介に対面し得るかの妄想のうちに精神の闇は次第に濃く彼の身邊を押し包み、「人は私を理解したか―ディオ

ーニユズス対十字架にかけられたもの (Hat man mich verstanden? Dionysos gegen den Gekreuzigten) <sup>(1)</sup>といふ謎の如き一句を最後に狂気の夜に姿を没し去るのである。

〈ヘブライーキリスト教的〉宇宙否定から脱出し、〈ミクロコスモス〉として〈マクロコスモス〉に道交せんとしたニーチェの方向そのものが誤つてゐたのではない。その媒介を司る〈中間の宇宙〉がニーチェに、否、ニーチェのいはゆる〈神〉の死によつて宗教的生命を喪失した全西欧に欠けてゐたところに、ニーチェの、また全西欧の悲劇があつたと思はれる。

私たち日本人は〈祭祀 (Kultus)〉と〈神話 (Mythos)〉との幽顯出人、表裏開合の緊密な応和のうちにそのやうな〈中間の宇宙〉が、日本においては―一部神官たちの怠惰にも拘らず―なほ保たれてゐることの至重なる意義を深省すべきではないであらうか。

\* \* \* \* \*

思想家ニーチェは、戦士として裁断者として偉大であつたが、建立の任務を帯びたヘーロスではなかった。もちろん、コスモスを照徹し、稔りをもたらす温熱によつて私たちのために創造してくれる太陽ではない。もとよりいかなる天才も人間の分際でそのやうな太陽ではあり得ないであらうが。何はともあれ、彼が陰暗な世紀末の西欧に投げ込まれた炬火であつたことに疑ひはなからう。それに点火されて燃え上つた優れた人も皆無ではなかった。しかしこの〈浄罪火 (Fegefeuer)〉は西欧全土に燃えひろがることなく、<sup>けだ</sup>気怠るく陰湿な空氣のなかで立ち消えてしまったやうにみえる。すなはち時代の裁定者としての、また来るべき時代の準備者としての壮烈な戦に挺身し、遂に孤独な戦死を遂げたニーチェの真姿を良心的に確認した人の数はまことに寥々たるものであつたらしくみえる。そしてニーチェの研究が隆盛の極に達しつつあるかにみえる今日においてもこの間の消息に根本的変化のみられないのは何によるものであらうか。



それはニーチェが敵にまわした勢力が余りに巨大にすぎて、現在においても一流の思想家、哲学者と目される人々もなほそれに対する畏怖から免かれてゐないからではないであらうか。もしそこに現代西欧の——その亜流としての日本の学者たちの——致命的な怯懦と怠惰が認められるとすれば、——宏大無辺な〈神意〉といふやうな問題は暫らく圏外に置いて——何人も認めざるを得ない地球人類始つて以来のこの危機に対して、それが全く責任がないといひ切れるであらうか。今日、幾人のゲオルゲが現れても、否、ゲーテやプラトンが再来しても、もはやこの大破局を喰ひとめる術は西欧には残されてゐないであらう。未曾有の大戦はあるひは避けられないかも知れない。その大清祓のあとで、地球と人類がなほ生き残り得たとすれば、そこに始めて一切が新たになり、新天新地に清冽な光が差し初めるのではないであらうか。その光は果していづこより?、〈Ex Orient Lux〉——この余りにも人口に膾炙しすぎた箴言の無限の深さと不可測の射程とに、今にして私たちは慎重に想ひを致さなければならぬ。——昭和五十五年九月二十七日——

## 注

## II

## A 永劫回帰

## 1

- (1) Karl Löwith: 〈Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen (1956)〉のなかの〈Anhang. §6.〉参照

- (2) Ludwig Klages: 〈Die psychologischen Errungenschaften Nietzsches〉S. 225—7.

- (3) a. a. O. S. 216.

## 2

- (1) Kairos・キリシヤ語は *KAIPOΣ*, *Θ.* 英訳は *Time, the right season, the right time for action, critical moment.* などとなるが、神学者ハウル・ティリヒ (Paul Tillich, 1886—1965) によつてキリスト教神学の根本語の一つとなつた。

の「カイロス」は、英訳の後の二語の意味に近いであらう。すなはちティリヒは「ガラテア書」四の四にみえる「時が満ちる」の言葉に照準し、「運命であるとともに私たちに肉迫して決断を迫る瞬間」をカイロスの真義とした。

- (2) たとへば「ニーチェは悲劇の誕生」においてプロメーテウス伝説が、協同体をなすアリアン諸族の根源的財産であるに對し墮罪神話がセム族の本質を特性づけるものであり、前者が巨神的ヘーロスの神を無みする男性的剛毅を特質とするに對し、後者は女性的陰湿を特質するとのべてゐる (G. d. T §9)

- (3) Georg Simmel: <Schopenhauer und Nietzsche. 1923. dritte unveränderte Auflage. S. 183> 参照。ズィムメルの証明は次のやうなものである。「ここに共通軸の周囲を廻る三個の輪があると考へよ、その輪のそれぞれに一つの印がつけられてゐる、しかもこの三つの印が最初には同じ一線上に並ぶやうにである。そしてA輪には1の速度、B輪にはその二倍の速度、C輪にはAの $1\pi$ の速度が与へられる。しかも $\pi$ を分母とする分数は永久に完全数にならぬやうに $\pi$ の価を定めておく。するとA・B両輪の印は、Aが一回転し、Bが二回転するとき、再びはじめの線上で對面し、このやうにしてその倍数毎に同一線上への回帰は繰返へされる。しかしC輪はもともと $n\pi$ が完全数にならぬやうな回転速度を与へられてゐるのである。よつてC輪の印はAが $n$ 回転し、Bが $2n$ 回転する間、一度も両輪と同時に同一線上に回帰することはない。かうして最初同一線上にあったA・B・C・三輪上の三点は、一旦定められた運動を始めると、永久に同一線上の再会の機会を失ふことになる。僅か三点の場合にすでにこの通りであるとすれば、他は推して知るべしであらう。

- (4) <Also sprach Zarathustra. Dritter Theil. Der Genesende.>  
 (5) a. a. O. <Von alten und neuen Tafeln.>  
 (6) a. o. O. <Erster Theil: Von den drei Verwandlungen.>  
 (7) 信太正三著、「永遠回帰と遊戲の哲学」一九九頁

## 4

- (1) <Zarathustra. Dritter Theil. Vom Gesicht und Rätael. §1.>  
 (2) a. a. O. <Der Wanderer.>

## B &lt;超人&gt;

## 1

- (1) M. A. Bd. XVI. S. 138—9. (Aus dem Nachlass: Studien aus der Umwerthungszeit 1882—88.)

(2) Zarathustra: Dritter Theil. <Von alten und neuen Tafeln. §12, §28.>

3 <凡く〇欄外>

1

(1) M. A. Bd. IV. S. 189— <Die Philosophie im tragischen Zeitalter der Griechen. §9.>

a. a. O. <Die vorplatonischen Philosophen §11.>

(2) <Die Fröhliche Wissenschaft. Fünftes Buch, "Wir Furchtlosen." §372.>

(3) 断片九四° トリ Wilhelm Capelle 〇 <Die Vorsokratiker> 246 トリヤム臨や長トリヤベ°

<Die Sonne wird ihre Maße nicht überschreiten; wenn aber doch, dann werden die Erinnyen, der Dike Helferinnen, sie zu fassen wissen.>

トイン訳 〇 <Die Sonne> ナギロシヤ原文ニナ <Helios> トヤベ° (W. Capelle. S. 140)

2

(1) <Die Fröhliche Wissenschaft. Fünftes Buch. §373.(Bd. XII, §315)>

4

(1) <Ecce Homo: Warum ich ein Schicksal bin. §9. (Bd. XXI. S. 286)>

## 《思想家としてのニイチィ》附録

へ高き山々の頂よりへ

——「善惡の彼岸」のための後歌——

嗚呼、生の正午！ まことに壯嚴の極みの時刻！

嗚呼、夏日耀ふわが園！

祥福<sup>さち</sup>いたるか<sup>は</sup>と心逸<sup>は</sup>り或は竝<sup>た</sup>ち或は窺<sup>は</sup>ひまた待ちつ！

心の構へゆるびなく、ひねもす、よすがら待ちに待てるを、

御身らいづくに止まれる、友らよ、来れいざ！ 時は今、今ぞその時！

御身らを迎へん、とには非りしか、今日のこの日

氷河の灰色の、薔薇<sup>そうび</sup>もて飾られしは？、

溪流は御身らを捜し求め、くがれあくがれ、今日、

小  
野

浩

風と雲とは互<sup>かた</sup>みに揉みあひ、また逆折し、高く、また高く青霄に騰る  
邃遠の境に鳥と化<sup>な</sup>りて、御身らの来るを窺はんため、

遙か高きに御身らのため、わが宴卓はしつらへられたり―

星辰にかくも近く、奈落の鳥肌立つ絶域に

かくも深く棲めるは誰ぞ？

これぞわが邦土―いづくの疆域ぞかかる広袤を有したる？、

しかしてわが蜜―何人かそを嘗味したりし？、

友らよ、御身らいまわが眼前に！ ああされどうたてしや、

御身らの求め寄らんとせしは、われに非りしか？

御身ら逡巡しかつ驚愕す―ああ寧ろ憤恨を発せばよかりけんに！

われはもはや、昔日のわれに非ざるか？ 手、歩<sup>あゆ</sup>み、面貌、その悉くを替へられしか？

しかし御身らにとりてわれなるもの―われはその者にはもはや非るか？

別人とわれはなりしか？ しかも自己にすら無縁なるものと？、

そはわれ自ら<sup>みづか</sup>より芽吹きいでしものか？

われは成りたるか、余りにも屢々おのれ自身を制圧し

余りにも屢々おのが力に逆らへる格闘者、

おのが勝利によりて傷つき、おのれを防遏する力技者に？

われは求めしか、利鎌<sup>とがま</sup>なし風吹き荒ぶところを？

棲むことを学びたりしか、

白熊遊ぶ荒涼無人の境に？

人も神も呪咀も祈りも忘れ果てしか？

氷河を眼下にわたりゆく幽鬼となり了<sup>お</sup>ふせしか？

——見よ！ 御身ら懐しき友どち！ 御身らいまわれを一瞥し色を失ふ、

愛情あふれたれど、嫌悪もまたその極に達して、

否、立ち去れよかし！ 憤怨する勿れ！ ここは御身らの棲み得る処ならず、

ここ、氷雪と巨巖とのまこと遐遠なるこの狭間<sup>はざま</sup>は！

ここにありて人は獵夫<sup>さう</sup>にしてまた羚羊に等しきものたらざるべからず

まこと、性悪<sup>しやうあく</sup>の獵夫とわれはなれるかな——見よ、いかに

垂直にわが弓弦の張られたるかを！

かかる強弩を引絞りたるもの、そはまことに至剛のものたりしなり！

されど災ひなるかな！ 危きはこの矢、

まこと、類<sup>たぐ</sup>ひなき勁箭ぞ、こは。——立去れここより！ 身に恙なからむため……

身を翻<sup>ひるがへ</sup>し去るか、御身ら？ ああわが心よ、よくぞ耐へたる、  
汝<sup>いまし</sup>の希望はその勁きを渝へざりき、

新たなる友らのために汝の扉は開きおけ！

古き友らは去るにまかせよ！ 追憶は捨ておけ！

かつて汝<sup>いまし</sup>は若かりき、今は――さらに優れて若かし！

往昔<sup>そのかみ</sup>、われらを結びたりしもの、それは同じ一つの希望の絆――

誰か読まんそのしるしを

かつて愛の筆もて銘記され、なほおぼるげに残れるを？

われは比定す、そをかの羊皮紙に、黄ばみ、日に焦げ、

手にとるも厭はしき――かの羊皮紙に、

もはや友垣に非ず、そは。――されどそを何と呼ぶべき？――

唯、友のまぼろしとのみ！

夜も更けぬれば、そはいまもわが心を、またわが家の窓を叩き、

われをみつめて語るべし、「往昔<sup>そのかみ</sup>は、われらも友垣にてありしを」と。

ああ枯れ凋める言葉よ、むかしは薔薇<sup>さうび</sup>の如、馨<sup>かぐ</sup>わしかりしを！

ああ、若き日のあくがれよ、われその本姿を思ひ違へたるよ！

わが待ち焦がれし人々、

わが血に等しくして、ひとしく転身の能力<sup>ちから</sup>ありとわが思ひ誤りし人々  
彼らも遂に老ひ、老ひの壘<sup>まじ</sup>にかけられて、われより連れ去られぬ、

常住に転身を為し得るもの、そのもののみひとり、わが血に親しきものぞ、

ああ、生の正午！ 再び迎ふる青春のとき！

ああ夏日耀ふわが園！

祥福<sup>さち</sup>いたるかと心逸り、或は竝<sup>た</sup>ち、或は窺<sup>のぞ</sup>ひ、また待ちつ！

日ねもす、夜すがら、心の構へゆるびなく、今や遅しとわれは待てるを！

新しき友らよ！ 来れいざ！ 時は今、今ぞその時！

この歌は訖りぬ—憧れの甘き叫びは

いまわが口内<sup>くち</sup>に絶息<sup>め</sup>す、

かく為せしは一人の魔術使、ふさはしき時に来たりし友、

正午の友か—いな、そは誰人ぞと問ふこと勿れ—

まこと正午にてありき、一が岐れて二となりしは……

さればわれは言祝<sup>ことほ</sup>がん、一つと化<sup>な</sup>れる勝利を固く信じて、

祝祭のうちなるこの祝祭を、

友、ツァラトウストラは来りぬ、客人<sup>まらうど</sup>のうちなるこの客人は！



いま宇宙は咲ふ、悚しき帳は裂け、  
光と闇との婚姻の宴は始まりぬ……

(昭和五十五年六月六日訳)